

いしかり 曆

追悼 田中實・高木憲了顧問

哀惜 石狩市郷土研究会顧問高木憲了・田中實両氏の功績を讃えて
……………村山 耀一… 1

高木憲了顧問の略歴と業績

田中實顧問の略歴と業績

追悼 高木憲了・田中實郷土研究会顧問……………田岡 克介… 9
田中實先生を偲んで……………安井 澄子… 9
禪……………星川富美子…10
お別れの言葉 ―感謝―……………高瀬 たみ…10
高木顧問・田中顧問追悼……………寺尾 陽助…12
昭和二十年代の田中實先生……………茂内 義雄…12
追悼のことば・忘れがたい思い出

三島照子、安田秀司、土井勝典、秋山正子、吉岡律子、
釣本峰雄、山内幸子、若林真紀子

研究編

田中實氏が撰文された石碑を集めて……………村山 耀一…19
美と歴史の集大成 ―了恵寺百年記念宝蔵館―……………高瀬 たみ…32
石狩尚古社と鮭……………中島 勝久…33
開通から50年「石狩河口橋の開通」にまつわる
厚田村・浜益村の記録とできごと……………寺尾 陽助…38
資料紹介
山田文右衛門履歴……………工藤 義衛…48
石狩町沿革史……………村山 耀一…59

第 36 号

2023. 3

石 狩 市 郷 土 研 究 会

哀惜 石狩市郷土研究会顧問高木憲了・田中實両氏の功績を讃えて

石狩市郷土研究会五代会長 村山 耀一

石狩市郷土研究会の顧問であつた高木憲了氏が令和四年十月五日に、田中實氏が同年二月一〇日に相次いで亡くなられたことに、會員一同深い悲しみを感じております。お二人は郷土研究会にとって大きな存在でありましたので、とても残念でなりません。

石狩市郷土研究会はお二人が三十代半ばの頃、石狩町内の農家の畑から出土し、捨てられていた土器類を目にして、石狩にとつて、その回収、調査、保存の必要性を専門家の指導を受けながら強く感じられたことが発端で、石狩に眠っている歴史を掘りおこすことの重要性から志を同じくする仲間を募り、昭和三十五年三月三十一日、石狩町郷土研究会を創立されました。

創立時には七十四名の會員が集まり、石狩八幡神社宮司花田知也氏を初代会長として活動をされました。当時は遺跡・海浜植物・神社・風俗慣習及び集落の入植状況の各調査と、文化財台帳の作成、古老談話集の編集など、会の目的に通ずる基礎資料の調査収集から活動を始められました。

時が流れ一昨年（令和三年）に郷土研究会は創立六〇周年を迎えることができました。これは全道でも二番目の歴史を持つ研究会であり誇れるものです。創立に関わつたお二人も顧問としてこの六〇周年を健在の中で迎えられていたことに、私たちは感謝と喜びに包まれておりました。

田中氏は創立当時から一四年間、昭和六二年から六年間本会の理事を務めその後、平成四年から四年間会長を務められ会長退任後は、現在まで顧問として頂きました。

高木氏は創立当時から一四年間さらに昭和六〇年から三年間理事を

務められ、昭和四九年から九年間、昭和六三年から八年間副会長、平成八年から七年間会長を務められました。会長退任後は現在まで顧問として頂きました。

お二人ともこれ迄の会の歴史の中で常に運営の中心におられ、事業の充実と発展のために尽力下さったことに深く感謝とお礼を申し上げます。

特に高木氏は、会長をされていた平成一二年から、了恵寺宝蔵館に収蔵されている貴重な歴史的品々を館外展示として「石狩市公民館まつり」及び、「石狩市民文化祭」に郷土研究会の名で展示して頂き訪れた市民から毎年好評でした。

貴重な品々の展示していただき、改めてお礼を申し上げます。

田中氏は会の創立当時から、例会には惜しみなく、多岐にわたる歴史資料を準備され、毎回のように講話をして下さり、私たちは多くの事を学ばせていただき、手元に貴重な資料を蓄積することができました。歴代の會員の中には田中氏のお話しを聞きたいという理由で會員になられた方も多数おりました。また、例会で他の會員が発表された時には補足説明を加えて下さり内容が深まることがありました。平成一五年から始まった「村山文書を読む会」では文書の文字を解説するだけでなく、文書に関わる時代背景や内容をいつも解説して下さい、この会は楽しく学ぶ場でありました。

お二人が創設した郷土研究会は現在會員数四十名で安定した構成になっています。高木氏が了恵寺の寺誌「もみじ山」三十七号に郷土研究会のことについて投稿され、次のような記述がありました。「現在は組織もしっかりとし、地域に根ざした活動を続けている事が心強い」と述べておられます。

私たちはこの遺志をしっかりと受け継いで地域に根ざした会の活動を続けてまいることをお二人にお誓い申し上げます。

本当にお世話になりました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

高木憲了顧問の略歴と業績



高木憲了氏

略歴

大正十三年一月二四日 香川県高松市香西北町

真宗大谷派常善寺第二十一世諏訪部憲章師六男三女の五男として生まれる。

昭和十一年四月 香川県高松工芸学校漆工芸科に入学。

昭和十六年十二月 (八日太平洋戦争勃発) 昭和一七年三月卒業予定だったが繰り上げ卒業となる。

卒業後横須賀海軍工廠に配属され、航空母艦『信濃』の建造に携わる。漆工芸科出身ということで『信濃』の器物に漆塗装に関わる任務であった。

昭和十九年十一月 中国大陸へ出征 帰国

昭和二十一年二月

昭和二十五年七月 大谷派にて得度

昭和三十年三月 大谷大学卒業

石狩町了恵寺に迎えられる 高木博子と結婚了恵寺後任となる

昭和三十五年三月 石狩町郷土研究会発足

理事として昭和四九年三月まで務める。

昭和三十七年五月 了恵寺にて石狩初の保育園誕生

昭和四十八年九月 了恵寺四世住職となる

昭和四九年四月 郷土研究会副会長に就任昭和五八年三月まで務める

昭和五十年一月 石狩文芸同好会立ち上げる

俳号「白洋子」(はくようし)で俳句、短歌をつくる

昭和六〇年四月 郷土研究会理事に就任昭和六三年三月まで務める。

昭和六十三年 郷土研究会副会長に再び就任し平成七年三月まで務める。

平成三年十月 為衆開宝蔵(百年記念館)完成 館長

平成八年 郷土研究会会長となり平成十五年三月まで務める。同年四月顧問となり令和四年度まで務める。

平成八年九月一日 【石狩市誕生】

令和四年十月五日 遷化 行年九十九歳 法名 恵寿院釋憲了法師

【その他の活動】

町史編集 遺跡調査発掘 社会教育委員 文化財保護委員
人権保護委員を務める

【いしかり暦十七号「柏林」の高木憲了氏投稿より】

昭和四十二年九月の北海学園大学藤本英夫氏による紅葉山遺跡調査に協力。『石狩町誌』上巻の石狩の

先史時代の項で資料提供。

『花畔の百年』『南線小学校開校七〇周年』『屯田九〇年史』『北海道の文化』『石狩の文化』うい一部執筆、寄稿

【趣味・特技】

絵画 詳しいスケッチ
短歌 俳句



【編集】

了惠寺小冊子 「もみじ山」

【いしかり暦】 執筆

第一七号 創立45周年記念特集号「柏林」 70頁

「郷土研究会と私 昭和三十五年入会」 高木憲了

第三十四号 創立六十周年記念号 20頁

「郷土研究会六十周年」 高木憲了

【例会】

平成十三年十月 特別例会 了惠寺にて「鳥瞰図と古写真展」

平成十四年十月十七日(木) 午後一時～ 了惠寺宝蔵館視察

平成十八年五月十八日(木) 午後六時～了惠寺にて

「三平汁」を食す会

平成二十五年五月一六日(木) 午後六時～ 石狩市公民館にて

「出征時航空母艦(信濃)に関わった事ごと」 高木憲了

尚、講演内容は、了惠寺ふれあい誌「もみじ山」に掲載有り。

平成二十七年 三十一号 「私の戦争体験へ前編」

平成二十八年 三十二号 「私の戦争体験へ後編」

平成二十九年 三十三号 「私の戦後」



例会で講演する高木憲了氏
平成25年5月16日

宝蔵館資料の館外展示

平成一二年(二〇〇〇)度

一〇月 石狩市郷土研究会特別展(了惠寺にて)

―巻物などにみる歴史展―

一〇月 石狩市民文化祭

―クリスマスカード展―

三月 石狩市第一二回公民館まつり

―温泉関係浮世絵展示― 全一六点

平成一三年(二〇〇一)度

一〇月 石狩市民文化祭

―鳥瞰図展― 吉田初三郎等画

一〇月 石狩市郷土研究会特別展(了惠寺にて)

―鳥瞰図と古写真展―

三月 石狩市第一二回公民館まつり

―双六展示―童話本・絵本展示―

平成一四年(二〇〇二)度

一〇月 石狩市民文化祭

―新聞錦絵と新聞資料リスト展―

平成一五年(二〇〇三)度

一〇月 石狩市民文化祭

―画家と表紙絵の女展―パネル五枚

三月 石狩市公民館まつり

―北の記念切手展―

電車記念乗車券・記念急行券・記念入場券・記念シリーズ急行券

平成一六年(二〇〇四)度

一〇月 石狩市民文化祭



―日露戦争開戦から百年―

三月 石狩市公民館まつり

―北海道の記念切符・風景印―

平成一七年(二〇〇五)度

一〇月 石狩市民文化祭

―明治の引き札と石版画展―

三月 石狩市公民館まつり

―雪まつりの追想―

平成一八年(二〇〇六)度

一〇月 石狩市民文化祭

―絵はがきでみる海と空―

三月 石狩市公民館まつり

―絵葉書にみる大日本帝国の外地と満州―

平成一九年(二〇〇七)度

一〇月 石狩市民文化祭

―日本の紙幣 明治初から― 軍票―

三月 石狩市公民館まつり

―「北海道の版画展」― 木版画浅野竹二作品

―石狩のポスター展―

平成二〇年(二〇〇八)度

一〇月 石狩市民文化祭

―夢二の描いたセノオ楽譜―

三月 石狩市公民館まつり

―防風林のある風景― 大森亮三木版画等

平成二二年(二〇〇九)度

一〇月 石狩市民文化祭

―篠路屯田兵 齊藤章作の家族―

一〇月 石狩市民文化祭

石狩郷土研究会「村山家文書を読む会」

―『諸国知人并宿名前附控』に関する展示―

江戸時代の生活用品・装飾品等全九点 展示

三月 石狩市公民館まつり

―版画で楽しむ風景― 本間武男シルクスクリーン

本間武男デザイン郵便切手・カレンダー他

平成二三年(二〇一〇)度

一〇月 石狩市民文化祭

―大正時代に描かれた非常に珍しい北海道観光案内図『漫画旅行』― 内外緑地版権『北海道』

―北海道関連絵はがき風景・風物など―

三月 石狩市公民館まつり

―アイヌ語の地名絵手紙― 今崎博子氏 画

平成二四年(二〇一一)度

十月 石狩市民文化祭

―松前藩主松前章廣と男爵松前隆廣の墨跡等―

藩主松前章廣筆 三幅 他

三月 石狩市公民館まつり

―十二支掛け軸 十二幅― 山形県出身日本画家

東海林僊芳(しょうじせんぼう) 画

平成二四年(二〇一二)度

十月 石狩市民文化祭

―大森亮三氏版画 八点―

三月 石狩市公民館まつり

―『勝平得之』版画 十二点―

平成二五年(二〇一三)度

十月 石狩市民文化祭

―新版画 大正・昭和の浮世絵美人画 八点―

三月 石狩市公民館まつり

―「阿部貞夫・松見八百造木版画」 七点―

平成二六年(二〇一四)度

十月 石狩市民文化祭

―千代紙 九点―

三月 石狩市公民館まつり

―絵双六(えすごろく) 五点―

平成二七年(二〇一五)度

十月 石狩市民文化祭

―千代紙 九点―

三月 石狩市公民館まつり

―色紙 九点―

平成二八年(二〇一六)度

十月 石狩市民文化祭

―昭和職業繪畫し 六点―

「女髪結」「出前道持ち」「救世軍」「ダンサー」「日

雇労働者」「寫眞屋」

―婦人グラフ 八点― 国際情報社発行

三月 石狩市公民館まつり

―竹久夢二 叙情画展(複製画)―

平成二九年(二〇一七)

十月 石狩市民文化祭

―中原淳一 絵葉書 十一點―

三月 石狩市公民館まつり

―高本暁堂作 木版画― 知床方面の作品 八点

平成三十年(二〇一八)

十月 石狩市民文化祭

―三菱芦別炭鉱の水彩スケッチ―

岸淑郎(きしとしろう) 昭和三六年制作当時

の炭鉱街の様子がわかる

三月 石狩市公民館まつり

―少女をテーマとした版画・油絵・切り絵など―

六点―

平成三二年・令和元年(二〇一九)

十月 石狩市民文化祭

―凧 一四點―

三月 石狩市公民館まつり

新型コロナウイルス感

染拡大防止のため 中

止

令和二年(二〇二〇)

十月 石狩市民文化祭

新型コロナウイルス感染拡大防止のため 中止

三月 石狩市公民館まつり

新型コロナウイルス感染拡大防止のため 中止

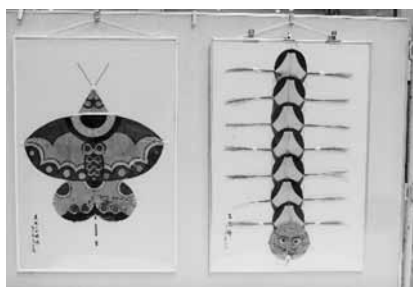
令和三年(二〇二一)

十月 石狩市民文化祭

―手ぬぐい 七點― 展示期間が二週間となる

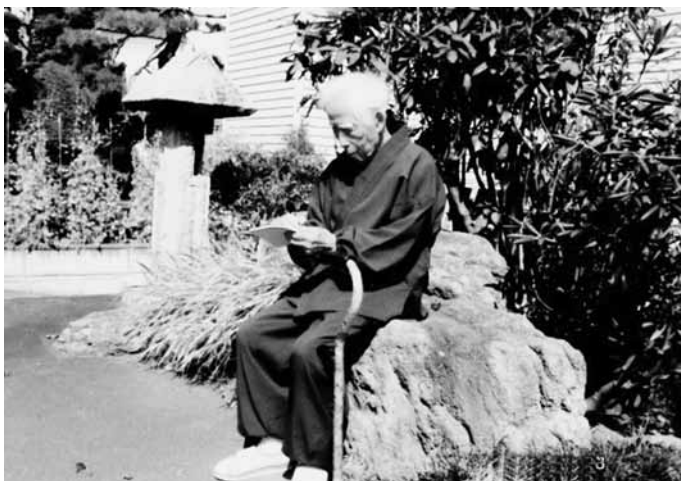
三月 石狩市公民館まつり

新型コロナウイルス感染拡大防止のため 中止



― 団扇 一七点 ―

※この展示期間中の令和四年十月五日に高木憲了住職が遷化されました。長い間、宝蔵館収蔵の貴重な品々を館外展示として石狩市郷土研究会の名で展示をして下さり有難うございました。



境内でスケッチをする憲了氏
令和3年(2022)9月28日

田中實顧問の略歴と業績



田中 實氏
平成 25 年 (2013)
11 月 5 日

略 歴

大正一五年三月一七日(水)石狩町大字船場町で父伍幣・母トキミの長男として出生。

昭和一五年 家業は海産商。両親は共に岩手県大槌町出身。

昭和二〇年 石狩尋常高等小学校高等科卒業後、千葉県白井町(現佐倉市)私立明倫中学入学

昭和二一年 同校卒業後、日本海軍に第二期特別幹部練習生して入隊。海軍二等兵曹で除隊。

昭和二二年 盛岡農林専門学校農業実科入学。

昭和二二年 三月同校修了。(恒藤・鏡・上村奨学賞授与)

昭和二三年 盛岡農林専門学校実験農場勤務。(稲作)

昭和二五年三月三一日 退職。(社会・職業)

昭和二五年 石狩郡石狩町農業調整委員会技手。

昭和二五年十一月 北海道技術吏員。技師。石狩支庁在勤。

昭和二七年 農業改良普及員を命ぜられ石狩町駐在。

石狩支庁石狩町農業



営農指導

改良相談所長心得。

昭和二九年三月八日 照井静子さん(盛岡市)と結婚。

昭和三〇年 同相談所長。

昭和三三年 石狩支庁石狩地区農業改良普及所長。特技(稲作・農業経営・土壤肥料)

昭和三五年三月三一日 石狩町郷土研究会発足する
理事として昭和四八年まで務める

昭和三八年 北海道吏員依願退職
北海道役場に転ずる。以後、企画室長、企画調整部長、審議室長、総務部長、町誌編纂室長、地積課長、土地開発公社理事長を歴任。

昭和五六年九月一日 石狩町助役に就任

昭和六〇年 石狩町助役を最後に石狩町役場退職。

昭和六〇年〜現在 北海道及び石狩の地域史研究に専念。

昭和六二年四月 郷土研究会理事として平成四年三月まで務める

平成四年四月 郷土研究会三代会長として平成八年三月まで務める。その後顧問として令和四年まで務める

平成八年九月一日 【石狩市誕生】

平成二五年一〇月三一日 北海道文化財保護功労者表彰を受ける

平成二五年一二月一四日 北海道文化財保護功労者表彰を祝会挙(ガトーキングダム札幌にて)

令和四年一二月一〇日死亡 享年九六歳 戒名 寿量院史眼實道居士

【主な委嘱委員】

遺跡調査協力員(昭和三六年・道教委)

北海道開拓記念館資料調査協力員(昭和四四年・北海道)

石狩町社会教育委員(二三年間)

石狩町文化財保護審議会委員(二四年間)

石狩町誌編纂委員(一一年間)

【主な編著書（共著も含む）】

- 石狩町年表・石狩町誌（四巻）
- 樽川百年史・たるかわの歩み
- 石狩川河口地区開発史年表
- 石狩川河口地区鉄道計画史概説年表
- 石狩湾新港史
- 生振村愛知団体開拓百年史
- 石狩八幡神社史
- 石狩弁天社史（昭和四二年）
- 石狩辨天社史（創建三〇〇年誌）
- 光明寺開教百年
- 文芸作品で綴る石狩三百年史稿
- 共生の森

【表彰】

- 北海道産米改良事業功労者感謝状（昭和三五年）
- 北海道社会教育委員会連絡協議会表彰状（昭和四八年）
- 石狩町教育委員会表彰状（文化財保護・平成二年）
- 石狩市制施行記念顕彰特別功労賞（平成八年）
- 北海道文化財保護功労者表彰（北海道文化財保護協会 平成二五年）



郷土研究会公開講座で講演する田中實氏
2004年3月12日

【主な所属団体】（平成二五年一月現在）

- その他感謝状三〇余
- 北海道史研究協議会（会員）
- 北海道産業考古学会（会員）
- 北海道緑友会（会員）
- 石狩文芸同好会（顧問）
- 石狩市郷土研究会（昭和三五年三月創立会員・顧問）
- 北海道土壌肥料懇話会（会員）
- 石狩市地震災害を学ぶ会（顧問）
- 石狩市友会（会員）
- いしかり縄文満月の会（顧問）
- 北水会（会員）



くつろぐ様子の田中實氏
(2017年8月19日)



例会で講話する田中實氏
(2014年10月16日)

追悼 高木憲了・田中實郷土研究会顧問

田岡 克介

五十年ほど前のことになりましたが、私が新人の役場職員として企画室に配属されたころ、田中實室長から紹介されましたのが高木憲了住職との初見であります。住職は度々田中室長を訪問され、談笑されていたのを思い出します。

その日は私の仕事机に置いてあった、子供のころ若生町宮住宅横の用水路脇で見つけた続縄文時代の椀型土器を手に取り、底部にクロスの切り込みを指し「ここに紐を通し吊ったのかな」と謂われた。私にとっては思いも及ばぬ一言であった。暫し、田中室長と三人で縄文土器談義をもつことができました。爾来二人を勝手に「師」と仰ぎ敬意の念を抱いてきました。

お二人の逸話を紹介するには、字数に制約ある本稿では到底尽くしえません。ご承知の通り、子どものような探求心をもったコレクターでもありますが、知識の豊富なこと、常軌を逸する読書と作文力は「大人(たいじん)」そのものでありました。「いしかり暦」にその一篇を辿ることが出来るのは、本刊創始者であります両故人のご遺徳と改めて感謝を申しあげます。「礼」。

田中實先生を偲んで

安井 澄子

コロナ禍の中お見舞いも叶わないまま、人づてにご様子を窺うばかりで、とうとう先生をお見送りせねばならなかったのは心残りです。慎んで感謝と哀悼の意を捧げます。

「田中先生のお話を聞けるだけで、毎月とても楽しいのだから」と郷土研究会の入会を薦められたのが動機のひとつでもありました。そ

の頃は毎回田中先生が講師で石狩の歴史や文化の勉強会が定例会であったようです。その見識の広さ、奥深さ、記憶力の素晴らしさに皆が感動をもらいました。私にとつては初めて耳にする興味深いお話ばかりで、唯々感心するばかりでした。

その様な中何か疑問が残った時なども、次回の例会には必ず、ご自宅の膨大な資料の中から古い資料を探し出してきて、実証して下さいました。永年、北海道史研究の重鎮でもあられた先生の「郷土史研究者としての姿勢、心構え」も教わりました。

石狩で生を受けられ、町役場に勤められた間に「石狩町誌」の編纂という役場職員の仕事柄と言うより、歴史家の目で石狩町の隅々まで、あらゆる事柄を見聞された生涯に亘る実績は「石狩の生き字引」として貴重な存在でありました。後年石狩町(市)民が発刊された地域誌や記念誌は殆ど先生の校閲を仰いでいたのではないのでしょうか。何時も徹夜で机に向かわれていらした様子を伺い、私など恐れ多くてお邪魔しないようにと畏敬の念のみでした。

農業改良普及所々長時代は、まだ車もなく自転車やバイクで、厳冬の農閑期にはスキーで高岡、美登位、生振、樽川、花畔等々の農村青年の研修会の為に、農家を次々と泊まり込んで自宅には一週間に一回帰って来た。と聞いたことがあります。

これもお子様のお話でしたが、「参観日も学芸会も運動会にも来てくれなかった」と。仕事一筋の壮年時代だったようです。晩年は広い家庭菜園で晴耕雨読、立派な野菜を作っておられました。数年前のある時「カラスにも絶対言葉があるよ。餌のある時は仲間を呼んで集めている」と。(本当に昨年テレビである大学の先生が野鳥のさえずりを分析し言語化しているのが放映されていました。)

雪道でも杖の代わりに自転車をおしての図書館通いを日課とされてきました。又、新しく手に入れた古書を前に「又、家内に叱られるナア」とつぶやいておられたお姿も懐かしいです。

私、個人的には、先生の貴重な数十年前の「石狩の古老（たまたま私の叔母の伯父）の聞き書き取材のメモノートを貸して下さいました。それによって私の叔母のルーツが、その昔余市の綱元柏屋藤野喜兵衛の娘と繋がり、叔母の父親は明治の三十年頃、幼少から小学校の前半頃、石狩町に育ち、伊藤房次郎の娘等と同級だったのが分かりました。これで益々歴史への興味に惹かれました。お礼申します。

永年縁の下で協力された静子奥様には、みんなで大層お世話になりました。有難うございました。又、晩年の先生の足となつて協力された若林真紀子さんも有難うございました。

禅

星川 富美子

高木憲了住職がお元気な頃、体験談、考え方：色々なお話を聞きました。そのなかの一つ。

高木さんは切手や絵葉書の収集を熱心にされていました。そこで切手で有名な国へ行つた時どんな切手ほしいのかと問うと、使用してない切手はいらぬ、生きた切手が欲しいので、どの場所からでも自分宛のハガキを出してほしい。私が恐れ多くてとても出せないと言うと、何も書かず高木憲了宛ならOK、消印付きで出して、とのことでした。世界一高い所に有る郵便局に行つた時、子供達にはハガキを出したけど高木さんには出せませんでした。約束守れず心残りです。

田中實先生の語りが大好きで例会に参加していました。講師の方の発表に沿って話が広がり、それに御自分の体験、経験された真実の語りで年・月・日まで頭の中に整理されており生き生きとした深みのある語りでもありました。私がいろはカルタを描いている時には「東西いろはカルタ」を、昔物語りの紙芝居を描いている時には「日本昔物語」の本を下さりその度に私の心を励まして下さいました。実

父形見の黒曜石を田中先生が持つ方が良いと判断したのも先生の懐の深さ大きさだと思つています。小樽の狂言舞台に夫と先生の三人で3回ぐらい鑑賞に行きましたが、それも懐かしい思い出です。本当にありがとうございました。忘れません。合掌

お別れの言葉 — 感謝 —

高瀬 たみ

令和四年一〇月五日に当会顧問の高木憲了氏、同年二月一四日、同じく顧問の田中實先生が相次いでお亡くなりになりました。

ご二人は、ともに昭和三五年に創立した「石狩町（当時）郷土研究会」の創立会員七四名のうちのお二人です。

同会の活動内容は石狩町域を八支部に置いて、遺跡・歴史・開拓・農業・漁業・風俗慣習・植物などの調査を自主活動するものでした（いしかり暦第一七号七頁）。以来、お二人は中心になって調査・収集・保存活動をされてこられました。それらが現在、石狩市の大切な歴史資料の基礎となっております。

ここに謹んで、行年九十九歳でお亡くなりました紅葉山了恵寺（りょうえいじ）第四世住職の高木憲了氏についてお話させていただきます。真宗興正派の北海道における開宗は他宗派より遅く、了恵寺が開山した明治二七年が同派の最初です。以後、四代にわたって同県人、その集落、関係者を訪ねて教えを広められました。その足跡は札幌別院を始め二〇余寺に及びます。従つて札幌別院より古く同派の基盤を築いた由緒あるお寺です。

縁あつて当山に入られました四世住職高木氏は、香川県香西町（昭和三一年高松市に編入）の方で歴史・芸術・文化に造詣の深い方でした。同氏が建立した「了恵寺百年記念宝蔵館」（*）には、平安時代から江戸時代にかけての仏画や木像などの寺の法宝物、氏が幼少のこ

ろから集められた収集品、石狩は勿論、道内、本州、世界に及ぶ幅広い諸史料が展示されています。

かつて、私（高瀬）は記念館で目録作成のお仕事をさせていただきました。そこでの見聞をお話したいと思います。

住職は故郷香川の話をするのが好きでした。「私は、生まれたときから収集家だった。香川というところは埴輪や瓦が埋まっている史跡が多く、そこで〈少年史跡調査団〉というグループをつくり仲間と史跡を探るのが何より楽しかった」、そこで見つけた埴輪が地元の新聞に掲載され、古いものだったので文化財になったといえます。仲間をつくり収集する楽しみを知った住職は、古代のお寺跡で瓦を探し宝物のように北海道に持ってきました。それが了恵寺百年記念宝蔵館の玄関に展示してお客様をお迎えしておりました。そのようなお話を聞くのが楽しみでした。私に仕事を与えてくださったのも仲間づくりだったそうです。

歴史の浅い北海道の石狩町（当時）に來られとき、意外にも、その足元から続々と鍬や土器が出土する遺跡がありました。「北海道に来てこんな嬉しいことはなかった」と。そこで同会仲間の故青木隆氏（この方も同会創立会員）と故田中實氏と三人で、「よく造田跡、雨上がりや春の畑おこし跡に遺物探しに行った」と、目を輝かせて話して下さいました。

石狩には鮭で栄えた江戸時代の歴史がありました。さらに、「文化がない」と言われていた石狩に、幕末に産声を上げた俳句結社があることが解明され、俳句・和歌を創るのが大好きな住職は、石狩の文芸復興だと喜ばれておりました。

そして、その間の昭和三五年石狩町郷土研究会を創立。

また、故田中先生方と昭和五〇（一九七五）年〈石狩町文芸同好会〉を立ち上げられ、亡くなるまで活動されていたそうです。

なお境内に建つ「開拓瑞穂堂」には、檀家さん等から寄贈された生

活用品、農業用具などが保存されております。

「了恵寺百年記念宝蔵館」で資料目録作成させていただいた二年間は、私にとって貴重な体験で、私の人生を豊かなものにしてくれました。た。

ご住職、多くのことをご教示下さり、ありがとうございました。

（*）今回、同本に発表させていただきました「了恵寺百年記念宝蔵館」については、「お別れの言葉」と重複する箇所もあります。

田中實先生には、長い間ご指導いただき、感謝の言葉しかありません。

田中實先生は石狩町職員のかたわら、石狩の遺跡、歴史、行政、移住、産業、交通、教育、石狩湾新港、文学などの調査を丹念に記録し、『石狩町誌』の上巻、中巻一・二、下巻の四冊に関わられた苦労がにじみでています。貴重な【宝物】を残して下さいました。

さらに数々の書籍・文章には、石狩の鮭の江戸時代を経て、入植開拓時代・畑作・道央の米どころ石狩となった農業、その矢先の米の減反政策、そして農漁業のまちから大規模住宅団地と石狩湾新港開発への都市化へ舵をきった石狩町の職員として、新港後背地として開発される農地の用地買収という重責を背負い、三〇〇軒の農漁家を一軒一軒廻り、変わりゆく石狩の野・浜の歴史をつぶさに見てこられました。その大地の記憶と人々の喜怒哀楽を記録に残すことが元住民の思いに報いることと、睡眠を削り各集落の記念誌に関わられました。

田中實先生との出会いは昭和六〇（一九八五）年、石狩町郷土研究会に入会したときでした。初めのころは例会の厳しい雰囲気緊張しましたが、田中先生の講座や、公民館事業の「マイタウン講座」を受けているうちに、石狩の歴史、先生の豊かな知識にすっかり魅了されました。

平成八（一九八六）年「いしかりガイドボランティアの会」を立ち上げたとき、教育委員会で発行した『ふるさと いしかり』を教材に田

中先生に教えを受けました。

私事ですが、『いしかり暦』や同会例会発表の原稿、タウン紙連載「いしかり歴史散歩」記事、ガイド本『ぐるっと案内』やガイド資料をまとめることができたのは、先生の書籍・文章を読みまとも、最後に添削して下さったおかげです。先生の文章を読むたびに、いつも残して下さったことに感謝しながら参考にさせていただきました。

また、郷土史を学ぶ人には、惜しめない助言、指導をして育てて下さいました。私は地元の人間じゃありませんので、レポートはいつも地元の人に教えていただきまともめました。その際、いつも田中先生かどなたかの紹介で取材させていただきました。その度に、どなたも熱心に教えて下さり、面倒がらず大切に保存していた古い資料を出して正確に話して下さいます。今も文章を読み返す度に話者の優しいお顔を思い出します。貴重な思い出です。

今、思うことは、郷土に関するものを大切にする同会の「蒔かれた種」だったと、改めて感じます。

ここに謹んでご冥福を祈るとともに心より御礼を申し上げます。
田中先生、長い間のご慈愛、御厚情本当にありがとうございます。
そして、沢山の感動をありがとうございました。

高木顧問・田中顧問追悼

寺尾 陽助

両顧問の訃報は、会だけではなく石狩市にとっても大きな損失なので、とても残念です。おふたりには郷土研究会の場ではなく、石狩市職員として大変お世話になりました。

高木顧問には、私が担当していた「石狩市俳句コンテスト」の審査員をご快諾いただきました。また、了恵寺の宝物館にある絵画等を活用した事業を行ったこともあります。

田中顧問には、図書館の事業や市制二十周年事業など、何度も相談をさせていただきました。また、すでに他界している父が田中邸に入りしていたことを最近知りました。

「古老が亡くなることは、図書館をひとつ失うことと同じ」と何かの本で読んだことがあります。おふたりの経験・知識などを鑑みると、まさにそう感じています。

おふたりのご冥福を心よりお祈りいたします。

昭和二十年代の田中實先生

茂内 義雄

茂内先生
今晩のお電話で石狩ロケの映画に
アリエッ生証人の方が千福区にお住まいと
のこと、五十年前に交流の齋藤全先生
ご死去のこと、お知らせ頂きありがとうございました。
関係資料同封いたしました。



後藤 純男 撮影「花」 168.0×169.0cm 1987年

志美小学校時の教育資料探すのに日教
がかりすので取敢て見出したものをたけす。
郷土研究会新年会などで色々とお話を
お聴きしたいと存じます。その節はよろしく。
御送りです。一層の自愛のほどを
十一月廿八日夜 田中 伴



後藤 純男 撮影「花」 168.0×169.0cm 1987年



例会でお話をされる田中顧問

私が定例会で発表した時に古い記録をコピーして頂いたコメントです。触れられているのは石狩の発泉小、志美小でご苦労された齊藤全校長との心温まる行き来です。先生が若き青年時代の一コマです。委細は近々完成予定の拙著報告したいものです。

追悼のことば・忘れがたい思い出

三島照子

高木さんには、郷土研究会の研修旅行や宝物殿を訪れた時にしかお目にかかれなかったのですが、いつも穏やかに接していただきました。研修旅行では時間があるとよくスケッチをしていたのが思い出されます。

田中先生は、私が司会進行をしていた「石狩の古老に話を聞く会」の話し手が見つからない時にお願いと、今度はどんな話がよいかと考えてくれました。また、お宅に伺うとお気に入りの骨董品や収集した資料をよく見せていただき、それらについてのお話をたくさんしていただきました。

私にとってお二人は、大らかな高木住職と困ったときの田中先生でした。

天国では二人で骨董談義しているのでしょいか。ありがとうございます。

安田秀司

私は二〇一三年に石狩市に転居して以降、たしか市民講座か何かで田中實先生を初めて知り、その博学さに驚嘆したものでした。その後、ご自宅に伺った際に「これはあなたが興味あると思うから」と自然関連資料もいただき、その気さくな姿に感激しました。私が郷土研究会に入会して数年間は例会で直接、お話を聞くことができ非常にありがたく、とにかく田中先生の知識の量が膨大すぎて、まるで宇宙を背負っているようなイメージでしたので、いつまでも存在しているように思えてなりません。

土井勝典

平成二十二年四月、いしかり市民カレッジの開校記念講座で話しを聞

いたのが田中實さんを知った初めてでした。その話を聞いて感動し田中實さんの講座を進んで担当するようになりました。

何度かお宅にお邪魔をし、話好きの田中さんからは時を忘れる程のお話を教えていただきました。郷土への関心が深まり郷土研究会に入会し、そこで古文書の解説など私に新しい世界を広げさせてくれました。ありがとうございます。

秋山正子

今日に至るまで数多くの例会を通して、先生が仕事で培われた経験と膨大な本を読みこなされた教養あふれる真摯なお話を聞かせていただきました。いつも例会が楽しみでした。

或る時、会の友人が重そうなりユツクを背負った図書館からの帰りに「先生を目ざとくみつけ、大きな声で「先生、又沢山の本を借りてきたんでしょ」と言ったのです。先生は照れて恥ずかしそうに、口を開けて笑って大きくうなずかれました。本のことではいつも皆に言われていたことと思います。

吉岡律子

図書館でお会いすると、いつも優しい笑顔で「今日もお勉強させていただけます。」とお話していた田中先生。あれだけの知識をもってしても謙虚なそのお言葉に、いつも背筋をピンとさせてもらいました。そのお人柄や知識の深さに驚かされるばかりでしたが、これからはその背中を追いかけながら、一ミリでも先生に近づけるよう学びの歩みを止めないことが、私の勝手な想いですが、田中先生への敬意を表せる唯一のことだと思っています。田中先生という素晴らしい方と出会えたご縁にただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

釣本峰雄

五〇年前に差し上げた葉書を数年前に田中先生から見せて頂いた時に、私の様な者の葉書さえも大切に保管して下さったと知り心が熱くなりました。その後も絶えず気にかけて下さり、ご自宅に呼んで頂いたことを感謝しております。

高木さんも宝蔵館にお伺いすると快く迎えて下さり、展示品について詳しくお話を聞かせて頂いたことを懐かしく思い出します。お二人が立ち上げた郷土研究会が今後一層充実し発展して行きますように。

山内幸子

郷土研究会に参加して2ヶ月、「厚田区の碑散策研修視察」は平成二二年七月のこと。田中先生も参加されていましたね。私にとっては神社と狛犬が一日にしてたくさん見られる絶好のチャンスで、味のある狛犬の写真を写して大満足！

高木さんは、石狩市郷土研究会の顧問を長らくされてきました。わたしの人生において大いなる影響を受けた人物でした。また田中先生には石狩文芸同好会の例会でアドバイスをたくさんいただきました。心のこりは、雪で作った狛犬の写真をお見せできず残念です。

若林真紀子

車を運転されない田中先生の「運転手兼通訳」として色々な所にご一緒させていただきました。図書館、美術館、古本屋、古美術店など行きたいところはいくつもあって、「行きましよう！」と言う私の声にうれしさ一杯の笑顔。美術館は道立近代美術館の五十嵐聡美さんがお気に入りだったこともあって何度も行きました。当時、五十嵐さんは近代美術館の学芸部長さんでお忙しい立場だったと思いますが、田中先生をとてても大事にしてくださいました。田中先生は展示を見て色々とお話をして下さるのですが、ちょっと耳が遠くなっていたので

知らずに大声になることが多かったんです。ですから私たちが行くとき静かな展示室で大騒ぎしているようになってしまい他のお客さんや五十嵐さんにご迷惑をかけたのではないかと思います。

ちょっとした文房具を買いに行ったり、病院にもお連れしました。文房具はコーチャンフォーのほかイオンなんかの大型店で買うことが多かったです。あるとき百円ショップにお連れすると、「ここは本当に何でも売ってるね。こんな素晴らしい店を知っている若林さんはずごいね。」褒めて頂いたのはいいのですが、これがまた店内に響き渡るような大声でドキドキしました。この十年はどこに行くにも田中先生と一緒に濃密な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

研
究
編

田中實氏が撰文された石碑を集めて

村山 耀一

石碑は人類が何らかの目的をもって銘文（碑文）を刻んで建立した石の総称で碑（いしぶみ）とも言います。その目的は特定の出来事や教訓、または人物の記録などを後世の人々へ伝えるメッセージなのです。

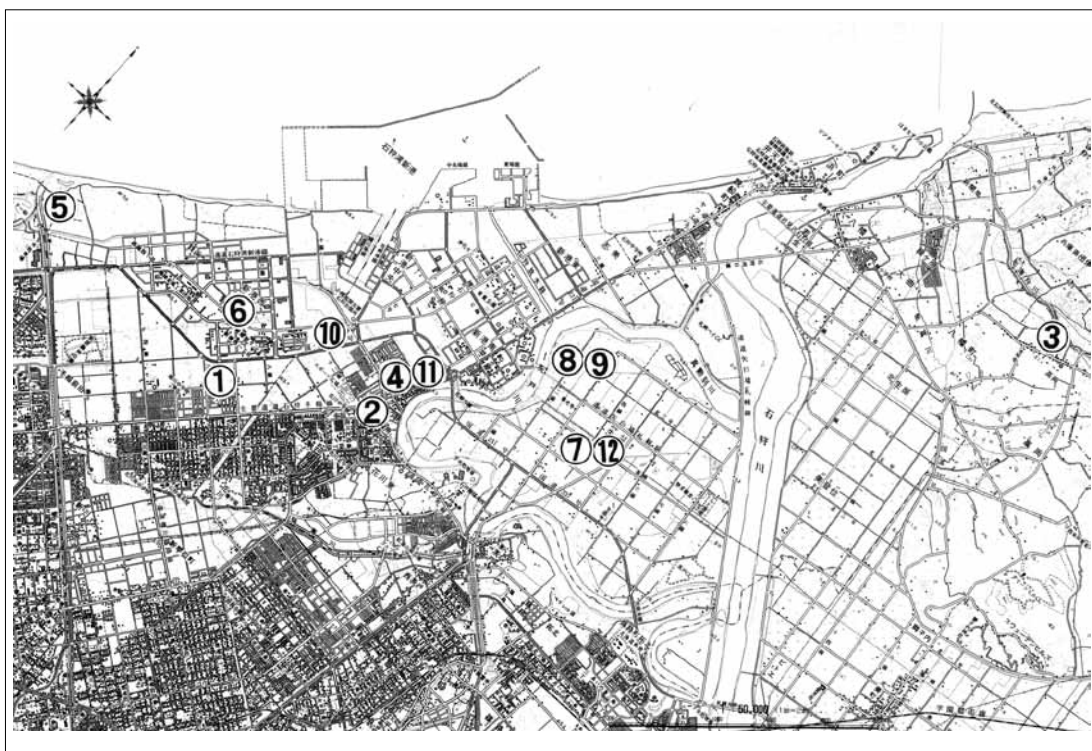
石狩市でも特に明治時代以降、神社や寺社の境内、各集落などに先人たちが多くの石碑を建立し、歴史の記録を残してきています。

石狩市郷土会では会の事業で『いしかり郷土シリーズ』として昭和六十二年二月に「石狩の碑」第一輯を発行して以来、昭和六十三年三月に「石狩の碑」第二輯、平成十八年二月に「石狩の碑」第三輯を発行しました。更に厚田村、浜益村との合併後の平成二十四年十二月に「石狩の碑」第四輯厚田区編を、平成二十七年十二月には「石狩の碑」第五浜益区編を発行し、石狩に残されている多くの碑の調査を行いまとめられました。

この冊子で特に旧石狩市に関わる第一輯から第三輯に掲載されている碑の中に田中實氏が昭和四十八年から平成十二年にかけて碑の撰文をされた十二基の碑がありますので紹介いたします。

これらの碑の建立は当時の石狩町が大きく変革された時期に重なっています。

昭和四十年代に入り樽川地区は団地造成が始まり、昭和四十五年には石狩湾新港の開港が閣議で決定され、一気に樽川地区、続いて花畔地区が変貌されていくのです。平成五十年には新港開発の関わりで樽川地区の一部が小樽市に譲渡されました。それに伴い現新港地区に住んでいた住民は移転を余儀なくされたのです。このような史実を後世に伝え残すために碑が建てられました。主なものとして「オタルナイ発祥之地」「樽川村移転之碑」「高岡開基百年」「開拓碑」「開田之碑」「開港記念碑」「戦没者慰霊平和記念碑」などがありますが、撰文を読むと、その碑が建立された経緯や人々の思いが歴史的にコンパクトに伝わってきます。



【田中實氏が撰文した碑の設置されているおおよその位置】

石狩に建つ田中實氏撰文の碑

①「樽川村移転之碑」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第一輯掲載

- ・所在地 石狩市樽川三三三番地（樽川神社境内）
- ・建立年月日 昭和四十八年（一九七三）十月
- ・高さ 一六七cm（台座を含む）



樽川村ハ明治十五年先人ノ入植ニ依リ開拓ニ着手スルモ湿润ト鬱蒼タル密林ニ困苦ヲ極メシガヨク土質ノ改良ニ努メ畑作酪農水田ト幾多ノ変遷を経テ樂土ヲ建設セリ
然ルニ昭和四十六年石狩湾新港地域開発ノ議起ルヤ地域住民挙ゲテ地主会ヲ結成シ新港実現ノタメ本村一部ノ行政区区域変更処置ヲ執ラザルノ止ムナキコトニ同意シ併セテ全域ヲ北海道ニ供シ協力ヲ致スコトトナル

樽川村移転之碑

ココニ於テ地主会々長宮野正勝以下相諮リ新タナル樽川村タラシメント此ノ地ヲ定メ全員協力シテ昭和四十八年移転セリ
昭和四十八年十月吉日
石狩町長 鈴木与三郎書
碑文 田中實撰文

（裏面） 役員・会員氏名等 省略

【説明】 昭和四八年一月一三日、樽川村移転之碑除幕式と樽川集会所落成式を実施

② 「飯尾圓什之像」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第一輯掲載

(裏面)

・所在地 石狩市北六条一丁目三〇番地二

(石狩市役所正面)

・建立年月日 昭和四八年(一九七三)一月

(当初は花畔青少年センター前に建立された)

・高さ 二六〇cm

・胸像製作者 本郷 新 新製作協会々員

・題字 元石狩町長 鈴木與三郎

・碑文 田中 實

・建立者 飯尾圓什氏顕彰記念事業協賛会

〈碑文〉 飯尾圓什之像



飯尾圓什氏ハ大正末期ヨリ砂地瘠薄
地帯ノ電氣揚水工事ニヨル水田化ヲ
主唱指導シテ率先ソノ実現ニ当リ昭
和三年十線地区ニ於テ成功同二十二
年町長ニ当選爾來在職スルコト十二
年此ノ間遂ニ二千余町歩ノ開田ヲ見
ルニ至ル衆ノ利益ヲ興シ穀倉石狩町
ノ基礎ヲ築キ且ツ町勢振興ニ盡サレ
シ功マコトニ著名依ッテ三十一年藍
綬褒章ヲ賜ワル新タナル町開発ノ時
ニ当リ茲ニ其ノ偉業ヲ讚エテ顕彰ス
ル

昭和四十八年十一月吉日建立

(協賛会名一覧) 省略

【解説】

飯尾圓什は、明治二八年一月二十日石狩町に生まれ、大谷大学を卒業、四十四年得度。函館大谷高女・北海高女に奉職後、帰町して能量寺副住職となる。

昭和三年、町会議員当選七年間滿了、八年住職就任、二十六年から三十四年まで石狩町長として活躍。

三十五年五月一五日没。享年六五歳

四八年一月一日、飯尾圓什氏顕彰記念の祝賀会(青少年センター)と胸像除幕式を実施。

③ 「高岡開基百年」 碑

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第一輯掲載

・所在地 石狩市八幡町字高岡（高岡神社境内）

・建立年月日 昭和五九年（一九八四）七月十五日

・高さ 三六〇cm

〈題字〉 高岡開基百年

石狩町長 寺内靖治書



〔碑文〕

この地高岡は一八八五年（明治一八年）山口県移住者により拓かれてからここに百年を迎えた

この間先人よく相助けて厳しい自然と幾多の苦難を克服し耕地を拡げ貯水池を築き土地改良に専念築土建設に励むその素志よく達せられ今や高岡は当町水田発祥の地全道屈指の畑作先進地として隆盛を見るに至った 開基百年に当り往時の労苦を偲び先人の偉業を讃え追慕感謝の誠を捧げてこれを後世に伝えるためこの記念碑を建てる

昭和五十九年七月十五日

高岡開基百年記念事業協賛会

石狩町助役

田中

實 撰文

高富土地改良区理事長

長江

勇 書

（裏面） 高岡居住者名は省略

④ 「開拓碑」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第一輯掲載

- ・所在地 石狩市花畔五七三番（花畔神社境内）
- ・建立年月日 昭和六〇年（一九八五）八月
- ・高さ 三三八cm（台座を含む）

〈題字〉 開拓碑

町村金吾書



碑誌

この地パンアグロは一八七一年（明治四年）三月盛岡県下陸中國岩手郡より招募移民として我々の父祖三十九戸百二十九人が入地したことに始まり五月花畔村が開村した翌五年の二戸を加え先人より困苦欠乏に耐え砂と水にいどみ開懇に励んだ

以来人増し耕地拓け穀倉地としての発展一世紀を経て今や石狩湾新港開発地域として新たなる繁栄を見るに至った

入地百十五年を迎えここに碑を建て父祖の偉業を讃え感謝と追慕の念を永遠に伝えるものである

昭和六十年八月

開拓碑建立実行委員会

田中 實 撰文

霜触重雄 書

（碑裏面）昭和六十年建立

（台座裏面）発起人代表名等 省略

⑤ 「オタナイ発祥之碑」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第一輯掲載

所在地 小樽市銭函四丁目

(旧石狩町大字樽川村小樽内)

・ 建立年月日 昭和六十年(一九八五)十月

・ 高さ 一九三cm(台座を含む)

・ 建立者 樽川発祥之地記念碑建立期成会

〈題字〉 オタナイ発祥之地

森戸芳衛書



碑文

此の地は原名オタナイと云い
石狩町樽川発祥之地である。石
狩湾新港建設に関連して小樽市
に編入された。

林 實次郎 山本 七郎
林 新一郎 佐々木幸次郎
(故) 渡邊 精一郎 柳澤 重雄
林 栄信 佐々木 由春
錢谷 由五郎 佐々木 幸作
(故) 佐々木 由松 久津間 ミツ
(故) 錢谷 安太郎 岡崎 勇
本保 幸男 林 町造
佐々木 政美 松浦 藏造
(故) 高橋 福松 関口 敏雄
(故) 小沼 平治 佐々木 政信
(故) 久津間 百槌 林 萬造
(故) 小沼 吉三郎 古谷 正一
(故) 小沼 清次郎 赤間 輝雄
(故) 岡崎 伊佐藏 渡邊 清壽
佐々木 誠 渡邊 昌幸
(故) 佐々木 富吉 佐々木 留吉
昭和六十年十月 建立

樽川発祥之地記念碑建立期成会

田中 實 撰文

霜触重雄 書

(台座裏面)

古へにひらき初めしオタネはま

人はうつりて潮騒ぞきく 秀峰

(台座左側面) 省略

(秀峰は米田秀司)

⑥ 「樽川発祥之地」 碑

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第一輯掲載

碑 誌

・所在地 石狩市新港西七八四番地（樽川公園内）

（旧石狩町大字樽川村西七線）

・建立年月日 昭和六十年（一九八五）十月

・高さ 二九〇cm（台座を含む）

・建立者 樽川発祥之地記念碑建立期成会

〈題字〉 樽川発祥之地



此処石狩町樽川の発祥地はオタナイにして江戸時代後期鮭漁場開設 フンベオマイ之に次ぐ 明治十五年樽川村開村 同十八年山口県人集団移住し安住の基礎を築きたり以来一世紀農漁業栄え来れりも石狩湾新港建設に關連して村域の一部を小樽市に割讓土地を北海道に供し村民新団地に移る
依つてここに碑を建て來歴を偲び先人の偉業を讃え永遠に之を伝える

昭和六十年十月建立

樽川発祥之地記念碑建立期成会

田中 実 撰文

霜触重雄 書

（碑の裏面） 寄進者芳名 省略

【説明】 昭和六〇年二月二四日、除幕式・祝賀会を

樽川公民館で実施した。

⑦「開田之碑」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第三輯掲載

- ・所在地 石狩市生振五線北（創生園内）
- ・建立年月日 平成二年（一九九〇）十月十日
- ・高さ 約一八〇cm（台座を含む）
- ・建立者 開田之碑建立委員会

〈題字〉 開田之碑



開田之碑

此の地生振村は明治四年の開拓に始まる。以来度重なる自然災害との苦斗のなかで畑作から畑作酪農経営を主として営農を続けてきたが地力の低下収量の減生産物の価格低落等により畑作農業だけでは到底生活の安定を保持できないことを認識するに至った。時恰も昭和二年（一九四九）には明治初期以来の大旱魃に襲われ高燥砂質型の早害対策村民大会を開催した席上時の飯尾町長は抜本的対策は稲作転換以外に方途なしと力説その熱意溢れる勸奨により水田化の機運が一挙に高まった時を置かず発起人会及び村民大会を開いて五〇二ヘクタールの造田計画を決定し関係官庁に請願の結果二五年度からの道営灌漑用水施設事業と決まったが年内着工の素志強く委員長松田治平副委員長関戸龍委員宮前茂重吉田武雄中田栄太郎の諸氏は物資欠乏の時勢下での食糧や機材の確保多額の資金調達 冬季間の工事監督などに東奔西走し多くの困難辛苦に遭遇したが 終始一貫その職務に精魂を注ぎ組合員また之に協力して精励の結果二五年六月九日通水式を挙行して一部作付けを済ませ引続き全地区の工事を完遂したこの事業費は三六四八万円で国費道費 補助金は二八二七万円 地元負担金は八二一万円のほか変電所工事費五三四万円であったが完工後の灌漑不足解消措置や借入金重圧により高率負担となり完納までに長年難儀の末よく之を克服して組織運営の正常化を達成した稲作経営も機械化と一貫作業体系の確立等によって四三年には村内作付面積八七〇ヘクタール産米出荷量六万俵の過半を占めるに至ったが四五年米の生産調整五三年水田利用再編対策の政策により逐年作付が激減し今日を迎えた。この間五〇年八月に石狩花畔土地改良区事務所を生振農協内に移転した然して昨今米を主とする農業環境は極めて厳しく前途予断を許さない最中当土地改良区四〇星霜を顧みて先達の先見の明と決断力と結果の強靱さに思いを深く致し決意を新たにすものであるここにその偉業を讃え追慕感謝の誠を捧げると共に来歴の概要を記しこれを後世に伝えるためにこの碑を建立する。

平成二年（一九九〇年）十月十日

石狩花畔土地改良区理事長 関戸琢也 揮毫
石狩町誌編纂委員 田中 實 撰文

石狩花畔土地改良区生振地区

⑧ 「関戸家譜之地碑」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第三輯掲載

- ・所在地 石狩市生振二線北一六（関戸琢也邸内）
- ・建立年月日 平成五年（一九九三）五月五日
- ・高さ 一五六cm（台座を含む）
- ・建立者 関戸琢也

〈題字〉 関戸家譜之碑



関戸家譜之碑

関戸家は尾張国丹羽郡岩倉村岩倉市の旧家にして十七代鐵次郎に至る、幼にして父母と別れ祖母の養育により家督を継ぎ農家に励むも明治二十四年の濃尾大地震に被災し再起困難となる、時に近郷の有志集って北海道開拓移民団体を結成し北辺の地にて復興を企画するや敢然之に加盟して十九才で渡道、同二十七年旧四月十五日石狩郡生振村二線北十六番地の貸下地に第一の鋤を下す、入地二年目小牧町より妻志ようを迎え相扶けて艱難辛苦を忍び一万五千坪を成墾更に農地を広げ遂に三万六千坪に達す

永住の基固まり郷国の資産を整理総本山に御供養し菩提寺の興道寺に大梵鐘を寄進累代の墓碑を建立す、此地に在りても堅く信仰する日蓮正宗の御法弘布に努め講衆を説き札幌布教所開堂に熱心に尽力し長年総代職を務む、生振開村百二十年記念式典に於て開拓功労者として表彰の栄を受ける

二代目の確は明治三十一年九月十九日長男として生まれ学業を終え家業を助け経営の安定に努む、その傍ら地域活動に尽し統計調査委員 石狩町農業共済組合理事、石狩町生振農業組合理事、石狩町農業委員等を歴任す、殊に昭和二十四年大旱害を契機として造田計画定まるや発起人として組織の結成官庁の折衝に奔走、計画面積五百ヘクタールの道営灌漑用水施設事業採択の目処のもと同年十月工事に着手す、推されて建設副委員長に就き物資欠乏の時勢下での機材食料調達に家業を顧り見ず寢食を忘れて渾心没頭能くその重任を全うし事業達成に尽せり、同二十六年石狩町議会議員に選出され町農業振興村内小学校の統合などに力を至す、開村百二十年記念式典に於て産業功労者として表彰の栄を受ける、また法泉山日正寺の総代副講頭として現在地への移転改築に誠心盡力す、妻かねのは公職に専念の夫に代り家業に精励家計を保持し子女の養育に務めたる好伴侶にして

内助の功に畏敬の念大なり

三代目の琢也は昭和五年長男として生まれ十六才にして家業を継ぐや旧石狩川畔低湿地の開墾の造田化に人馬をもって挑み六ヘクタールを開田、昭和の開拓者と父に誉められる更に努め出荷米一千俵を超えること数度に及ぶ、米の生産調整進み村内の牧草生産急増に際し大型収穫機を導入し北海道牧草(株)会社より請負三百ヘクタールの刈取り運送に当る次いで麦作広まるや率先して乾燥設備を整え自家産二千俵のほか村内生産者に供用し品質改善に一役を尽す、同四十五年北生産業(株)会社を設立し代表取締役につき村内の町道除排雪を請負今日に至る、此の間農業労務者募集委員 石狩町農業共済組合理事三期等を歴任し現在統計調査委員 石狩花畔土地改良区理事長の職に在る 日蓮正宗を護持し総本山正本堂建設の御供養により諸行事に参加す また日正寺の副講頭少年部幹事として鼓笛隊吹奏楽団の育成強化 同寺生振分院及び墓苑の建立造成に務む、長年よく内助の功を盡せる千津子との間に一男二女を得る法悦安穩の日々に感謝し父祖の辛苦を偲び偉業を讃え三代の足跡を永く伝えるため伝来の此の地に碑を建てる

入地百年の佳年 平成五年（一九九三）五月五日

撰文 郷土史家 田中 實
建立者 関戸琢也 六十三才

（裏面） * 関戸家歴代家譜は省略

⑨ 「この道百年句碑」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第三輯掲載

- ・所在地 石狩市生振二線北一六（関戸琢也邸内）
- ・建立年月日 平成一〇年（一九九八）一〇月一〇日
- ・高さ 約一五三cm
- ・建立者 関戸琢也



（碑文）

冬
晴の陽を浴び
この道
百年碑
實
冬
うらら
農百年
の
碑除幕
みのる作

石狩市郷土研究会顧問田中實書
平成十年十月十日建立
関戸琢也

◆ 碑文に「田中實書」とあるが、「田中實作」の間違いである。
書家は「原沢文字書」が正しい。（原沢氏は石狩市郷土研究会会員）

⑩ 「開港記念碑」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第三輯掲載

碑文

- ・所在地 石狩市新港中央一丁目（港公園予定地）
道道二二五号線沿い
- ・建立年月日 平成六年（一九九四）七月
- ・高さ 二〇五cm（台座を含む）
- ・建立者 石狩町新港促進協議会

〈題字〉 開港記念碑

石狩町新港促進協議会
会長 溝渕光雄書



石狩町民の長年の念願であった石狩湾新港地域開発計画に賛同して発足した石狩町地主連絡協議会（会長故宮野正勝）は北海道企業局との用地買収に応じたのが昭和四十六年（一九七二）の秋であった。私共の先祖が明治の初期にこの地に開拓の鋤を下ろして以来幾多の艱難辛苦を乗り越え畑作酪農経営から昭和三年の砂地水田化を成功させかつては北海道でも最も優良産米の地を築き上げた祖父達の汗と涙で成った美田の用地買収交渉が全国的にも例を見ない約半年の短期間で妥協したことは幻の港の実現に寄せた郷土愛と会員の団結によるものであったしかし買収後の開発事業は遅々として進まず

伝来の耕地が荒廃のままの状態を見るに忍び難く昭和五十一年（一九七六年）石狩町新港促進協議会（会長故桜田恒延）を結成以来約二十年間に亘り陰に陽に町当局並びに関係機関等に新港の早期完成と後背地の開発促進を要請し続けてきた。この間昭和五十七年八月（一九八二年）新港に第一船が入港した記念日に会員家族挙って式典に参加し祖父達も喜んでくれることに思いを馳せた時の感動は言葉に尽くせぬものがあつたそうして本年六月には待望の開港を迎え立地企業も六百社を越えたことは此の上もない喜びである

依って本協議会は目的を果たし解散することにし港が見える此の地に碑を建立し末永く後世に伝えることとする

平成六年（一九九四年）七月

石狩町新港促進協議会
田中実 撰文

（裏面 横書き）
記念碑建立費 総額 四二〇〇〇〇円

- 内訳 石狩町新港促進協議会 二〇〇〇〇〇円
- 特志 石狩町 一〇〇〇〇〇円
- 石狩開発株式会社 一〇〇〇〇〇円
- 株式会社 鈴木石材工業 二〇〇〇〇〇円

⑪ 「戦没者慰霊平和祈念之碑」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第三輯掲載

碑文

- ・所在地 石狩市花畔五七三番地二（花畔神社境内）
- ・建立年月日 平成九年（一九九七）八月一五日
- ・高さ 三九四cm（台座を含む）
- ・建立者 花畔地区戦没者慰霊平和祈念之碑建立協賛会

〈題字〉 新没者

慰霊 平和祈念之碑
北海道連合遺族会会長堂垣内尚弘書



昭和二〇年（一九四五）八月 満八年間にわたった戦争が終つてから半世紀が過ぎましたが振りむけば今なお胸痛みます。この大戦には花畔村からも多くの青年が国民の義務であつた現役兵として、また一家の柱や働き手の壮年は国の要請に応ずる召集兵として勇躍出征され護国の念を燃やして奮戦されました。しかし三五名の方々は遠い異国の地や洋上で散華され生きて再び家郷に帰らなかつたからです。その尊いご遺志を体して敗戦後の疲弊した郷土の復興にひたむきに働き続けた世代は老に入り、平和のなかに生まれ育ち自由と物的豊かさを享受する世代が多くなつただけに戦争の惨禍を繰り返してはなりません。かつての穀倉地花畔が石狩市の中核地域となつた今、平和と繁栄の礎となられた三五名の英霊に敬甲の誠を捧げ御名を留めて永くその勲を伝え、ともに、ご遺志を銘記して平和社会の道に一層精進することをお誓いして此の碑を建立します。

平成九年（一九九七年）八月十五日

撰文 元石狩町助役 田中 實
花畔地区戦没者慰霊平和祈念之碑建立協賛会

（正面の碑文に続いた）

花畔地域戦没者名一覧表は省略する

⑫ 「水鴻恩」

石狩市郷土研究会発行「石狩の碑」第三輯掲載

碑文

- ・所在地 石狩市生振五線北（創生園内）
- ・建立年月日 平成十二年（二〇〇〇）十月八日
- ・高さ 二三七cm 横幅約二八〇cm
- ・建立者 石狩花畔土地改良区設立五十周年記念実行委員会

〈題字〉 水鴻恩 農林水産大臣中川昭一書 ㊦



石狩花畔土地改良区は昭和二十五年（一九五〇年）に設立されその前後から生振地区ほか各地区に於いて開田事業を実施して戦後の食料需用の国策に応じました。その用水は旧石狩川からの電気揚水に依りました。顧みますと石狩川は古くは内陸への重要交通路でありまた全道第一の鮭の母なる川としてこのまちに大きな恵みを与えてきました。当土地改良区の二千ヘクタールを超える開田は農村電化の普及と二十万俵の米を生産し生活の向上と経営の安定をもたらし穀倉石狩の声価を高めました。

時移り昭和四十年代からは国土開発の脚光を浴び、耕地は大規模住宅団地・工業流通団地に転用された結果花畔樽川地区の水田作は終止符を打ち、同五十年（一九七五年）に当土地改良区事務所は生振農協内に移転しました。その後幾度かの米をめぐる厳しい情勢に対処しながら生振地区は一貫して水田経営を保持し先人の偉業を継承して今日に至っております。

昨年設立五十周年記念碑の建立を企て題字の染筆を本道選出の中川昭一農林水産大臣に懇請し「水鴻恩」との達意の御書を賜りました。光栄の極みであります。

記念碑の設立に当り半世紀にわたる往事を偲び、先人の功業を追慕感謝するとともに水郷生振の二十一世紀は四方を回る石狩川・諸川との共生に掛かることを信じこの意の永く継がれることを祈念して止みません。

平成十二年（二〇〇〇年）十月八日

石狩花畔土地改良区

理事長 関戸琢也

碑文郷土史家 田中 實

（裏面）石狩花畔土地改良区設立五十周年記念実行委員名、

篤志寄付御芳名 省略

美と歴史の集大成 ―了恵寺百年記念宝蔵館―

高瀬 たみ

平成三年（一九九一）に完成した了恵寺境内（花川南二条五丁目）にある「宝蔵館」（床面積二一八・一六㎡鉄筋コンクリート平屋造）は、正式には「為衆開宝蔵」といい、皆の為の宝物館ということで同寺の開基百年を記念して建てられました。

北海道における真宗興正派の歴史は、この紅葉山了恵寺より始まりますが、同派の開教は他宗派より遅く、本山立高松精勤教校（香川県）の校長だった高木了玄師により明治二十七年に石狩町に開山、以後、同県人の集落を訪ねて開教し、その足跡は札幌別院を始め二〇余寺に及びました。

宝蔵館には、このような由緒ある寺にふさわしく、平安から江戸時代にかけての仏画や木像などの法宝物を香川から、他は主に歴史に造詣が深い四世住職憲了氏（平成一二年現在、石狩市郷土研究会々長）が幼少のころから収集された多くの諸史料が収蔵展示されています。

常設展には考古出土品・アイヌ民族用具・仏画・世界の貨幣・經典・松前藩歴代藩主関係者の書・古瓦等々が陳列され、時代的背景を感じさせ教えてくれます。

これら諸史料が収集できたのは、古代の遺跡、寺跡や城跡、伝承が数々残る憲了氏の出身地、香川県香西町の存在にあります。

「史跡に囲まれて育ったので物心ついたときから収集していた」と語られるように、中学時代に〈少年史跡調査団〉なるグループをつくり、古老から聞いた伝承をもとに調査と称した遊びのなかで、奈良時代の瓦を発見したり、円筒埴輪を見ついたり、また、少年二人で漁師から借りた船を漕ぎ、無人島で発見した縄文土器は当時の新聞にも載ったといえます。

その後、いくつかの歴史グループで探求されてから、昭和三〇

年に石狩の了恵寺に迎えられた同氏は、ここでも同寺が建つ紅葉山砂丘上（約六千年前に形成された海岸砂丘）から数多の土器や石鏃などを見つけました。

「何もないと思って来た北の地で、縄文時代からの遺物類をみつけたときは嬉しかった」という感動が次なる感動を呼び、以後、発見した遺跡は三〇箇所余を数え、『石狩町誌』上巻に記載されています。

法蔵館には常設展示品の他に古地図・全国諸藩の藩札・こけし・アイヌ衣装・農具・生活用品なども収蔵され、現在、整理し公開する準備が進められております。

このように同氏がコツコツと集められた貴重な資料の数々が、歴史の浅い北海道で集大成され鑑賞できることは、とてもありがたいことであり、一市民として感謝いたします。

※ この文章は、北海道文化財保護協会発行の月刊誌『文化情報』―石狩市の文化遺産を訪ねて―に掲載されたものです。（平成一二年三月三十一日発行 No.二二六）



石狩尚古社と鮭

中島 勝久

北海道遺産である母なる川石狩川。石狩はその河口のまちである。石狩はまた、サケが呼び寄せサケが育てたまちでもある。この地は蝦夷地を代表するサケの主産地であった。明治に入っても石狩は鮭漁の黄金期で年に一五〇万尾の水揚げを記録することも珍しくなかった。

明治時代の石狩の文化で特筆されるものに俳句があり。安政三（一八五六）年に創始された俳句結社「尚古社」があった。初期の社員は石狩場所請負人として知られた村山家の七代目村山金八郎（俳号嘯月）、勇払出稼人名義で村山家の鮭場所を手広く経営した十代目山田文右衛門（俳号陽山）、幕府箱館奉行所石狩詰の足軽亀谷丑太郎（俳号桂香）、同御用処帳場勤番人増川菊次郎（俳号溪鶯）などが挙げられる。維新後も尚古社社員として亀谷、増川、石狩に居住し作句を続けた。

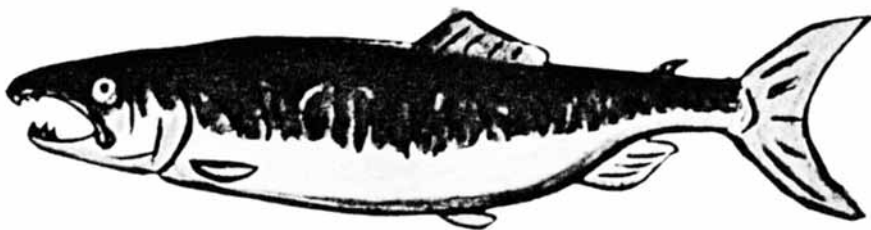
明治に入ると、村山家や井尻家などの漁業家やその支配人のほか、樺太アイヌ共救組合長上野正、同アイヌ授産教師高橋浪華、缶詰製造高橋合資会社々長高橋儀兵衛、中島呉服店番頭鎌田幹六、石狩小学校々長渡辺永助、秩父事件会計長井上伝蔵（欠席裁判死刑）その他町内寺社の住職、宮司たちも活発に尚古社に関わっていた。その交流は道内にとどまらず、中央俳壇で日本最初の全国結社である俳諧教林盟社に尚古社々員加藤円八（村山家の支配人）が、東京の俳句結社明倫教会には中島房蔵が加盟し、中央俳壇とも交流があった。実際に尚古社の俳句は道外の選者はもとより、中央俳壇の選者東京老鼠堂永機宗匠、蜂庵採花女宗匠に選を受けている。

こうした活動を続けるなかで明治三五年八月一日、石狩尚古社は石狩俳壇の一大事業として尚古社の人達による『尚古集』を発刊する。先亡社員一二名の霊を祭って石狩能量寺に於て大法要が行われたとき

に記念として刊行したものである。応募は北は北海道から遠くは琉球まで全国に亘り、その数三五三八句が選ばれた。それに物故遺吟、社員捧吟、客賓捧吟、更に社員一同による連句を加えて編さんされたものである。

又、選者には北海道の宗匠と全国の知名の宗匠達が参加している。物故者には石狩尚古社最初期からの社員や明治前半期の石狩町の有力者の名が見られる。

桂香、本名 亀谷丑太郎。
旦光、本名 宮崎義光。
梅童、本名 加藤傳太郎。
溪鶯、本名 増川菊次郎。
林一、本名 佐々木正次。
谿齋、本名 村井省三。
有隣、本名 加藤円八。
風楽、本名 平野及助。
箕山、本名 加藤傳兵衛。
淇水、本名 井尻静蔵。
月耕、本名 高橋浪華。
和扇、本名 泉喜兵衛。
更に尚古集の選者は道内の選者、
小樽 蘆菴對几詞宗。
小樽 六三舎其友詞宗。
岩内 勝莊菴錦風詞宗。
札幌 對月園北水詞宗。
余市 薺菴應井詞宗。
室蘭 幸の舎守雄詞宗。
厚田 龍洞舎大道詞宗。以上七名。
次に道外の選者は、



東京 不白軒宗匠。
尾張 羽洲園宗匠。
遠 江 七十二峯庵宗匠。
大 坂 俳禪窟宗匠。
三河 鋤雲居宗。
以上選者五名が務めている。

石狩尚古社の社員たち

尚古社の社員の中には多くの石狩町の名士たちの名前が見える。

- 露蕉 山田得兵衛 砂丘墓地「俳人露蕉の墓」あり
興信 馬場 興信 後、俳名を以蕉。法性寺住職
江雪 高橋儀兵衛 石狩缶詰工場経営者
柳蛙 井上 伝蔵 秩父事件会計長
石江 富田 安宅 医者、伊達邸主従、当別移住
若水 島山清太郎 二代目石狩町長
西史 上野 正 樺太アイヌ共救組合長
静里 岡村 静雄 三代目石狩八幡神宮社司
戸方 中島 房蔵 ⑤中島呉服店二代目
池菱 鎌田 幹六 ⑤中島呉服店主
桂舟 加藤 一魯 親船町外九町三村戸長
松下 中島源五郎 初代生振小学校長
松僊 飯尾 円蔵 二代目能量寺住職
露光 田中伊勢路 元石狩町助役田中實氏の祖父
松山 羽生 酉蔵 ⑤松羽生呉服店主
幾石 高橋 一精 ⑤高橋太物穀物商店主
蛾仙 倉辺 茂愴 石狩小学校教員
黄樹 横山 順倫 石狩郵便局長
楽山 山崎 利次 蟻卵、本名澤田

苔石 本名富塚
※栄、拝山の本名は調査中

尚古集最後の頁には物故社員の追悼法要が営まれたことが記されている。



配題 規句 集卷 開花 額面 終局

明治三十五年三月
故人俳名之内一字結
總計參千五百卅八章
八月十九日當地常行山能量寺ニ
於テ執行自午前八時至午後十時
横濱齋一朝全門人三十餘名之插花
故人遺像十二章副評三光并追加本評
三十客及三光追加掲載
八月念五日一社三ヶ寺へ奉納ス

以上
千時明治三十有五壬寅の秋
北海 道 石 狩
尚古社

このうち一社三ヶ寺とは石狩八幡神社・能量寺・金龍寺・曹源寺と
思われる。当時は全国的に神社や仏閣に句額を奉納する習慣があった。
更に大正七年の開道五〇周年記念句額も奉納されている。

尚古集の中で注目されるのは、明治一七年（一八八四）に起きた「秩
父事件」で欠席裁判で死刑判決を受けた井上伝蔵の句である。伝蔵は
石狩では伊藤房次郎という仮の名で潜伏し、柳蛙の俳号で尚古社々員
として活躍していた。

俳（おもかげ）の眼にちらつくやたま祭 柳（りゅう）蛙（あ）

この明治三五年の石狩町鮭漁獲高は二万五千尾であった。

石狩尚古社員の鮭の句

賑はひや鮭積船の続く風 増川溪鶯

引もきらず初鮭備う社かな 鎌田池菱

※右の二句は、明治二三年の作。この年石狩町の鮭漁獲高は
四七万一千尾であった。

初鮭や気合の多し魚市

初鮭の雫ばかりや得意先

※右の二句は作者不明で明治二六（一八六三）年の作。この年の石狩
町の鮭漁獲高は二七万尾であった。

石狩「今泉旅店にて」

はりをうつ一座の客や鮭の味 坂牛瓢齋（ひょうさい）

とる鮭を見て帰るなり秋の夕 同

見てかへる浦の豊かや鮭の肥 同

いえ土産に無心して加茂鮭のより 同

※右の句は明治三三年（一九〇〇）七月に盛岡より小樽新聞社本社の
記者に就任した坂牛祐直（俳号瓢齋）が、十月に石狩に取材に来た
時に詠んだ句である。今泉旅店（旅館）は石狩町でもっとも大きな旅
館であった。坂牛氏は明治四五年（一九一二）根室町長に就任し、大
正一〇年（一九二二）一〇月、第五代石狩町長に就任した。その後、
石狩尚古社々員として活躍した。尚、坂牛瓢齋の俳句活動については
「俳人石狩町長坂牛瓢齋の作品集」で詳述した（『いしかり暦』第二六
号）。

明治三三年の石狩町の鮭漁獲高は二万五千尾であった。

音に聞く名も大網や鮭の漁 田中北眠

※大網は字名で（石狩町大字弁天町字大網）。石狩海面鮭場所として
随一であった。現在の「石狩番屋の湯」の前浜に当る。右の句は、明
治三七年の作。この年の石狩町鮭漁獲高は、九万四千七四〇尾と大凶
漁。前年三六年は三三万四千三八〇尾であった。

石狩尚古集の選者巖谷小波（さざなみ）が石狩に来た時に詠んだ、
石狩川（秋の川）の句

秋の川幾代の木々も浮きはしむ 小波



東京の俳人三時庵其鳳に鮭を送る。

石狩で⑤中島呉服太物商店主で尚古社の社主にもなった、鎌田池菱は道外へ商用で出向いた際には、全国各地の高名な俳人たちと交流していた。

親交が深かった其鳳氏に明治四五年に鮭を送った礼状が遺されていた。三庵其鳳は、本名渡辺昇で別号東民と号す。九州大村藩士、明治維新の功臣で剣法の達人。のち大阪府知事、会計検査院長、貴族院議員などを歴任した。俳諧は肥後大村藩の河原悠々（蒼虹門）に学ぶ。

貴族院入後俳諧にうちこみ全国的に名高い俳人であった。大正二年（一九一三）年没。行年七十六歳。

鎌田池菱は其鳳の短冊九点を遺していて、現在尚古社資料館に展示している。石狩鮭はご馳走でもあり、地域文化の礎を築いた、当時としては高価な贈り物であった。

奉燈集―鮭―

石狩川の鮭地曳網漁業が郷社石狩八幡神社の前のホルカモイ（堀神）で始まると、初鮭は八幡神社に奉納された。神社の例大祭は九月一四・一五日であった。石狩尚古社では、毎年このお祭りに先立って句会を催し、その作品を大きな布地に「献燈俳句」と記して書き連ね道路をまたいで柱に高く掲げた。

今から約百年前の大正五年（一九一六）九月八日午後一時に開巻された「奉燈集」の出題は「鮭」であった。この時の「奉燈集―鮭―」の四〇句には、誰がどの句を作ったかは記されていない。互選集であり、出句者は次の一名である。

二代目尚古社々主の鎌田池菱（中島呉服店主・五六才）、堀松風（商業・五二才）、増田霞山（金龍寺住職・四六才）、杉沢芳翠（三六才）、佐々木遊水（浴場業、町史員・三一才）、末武香城（小間物商・三〇才）、中島湖菱（池菱の長男、商業・二七才）、拝原花風（理髪業）、岩本寿

笑（商業）。（年齢は大正五年当時）

鮭の句四〇のうち二〇句を添えた。

鮭は皆石狩川に群集せり

濱宿や朝忙しく鮭を焼く

初鮭や御扉開く神の前

大漁の網の袋や鮭の飛ぶ

初鮭や早やたそかれて競ふ声

初漁やこれこそ名高き蝦夷の花

千石の船入る河や鮭の味

元日の膳に誉れや鮭の味

川面暗く密漁船に鮭打つ音

鮭に酌んでピリカメノコの唄きかん

大漁の鮭のもっこや濱つゝき

賑しき物なり鮭の網おろし

北海や鮭とる船も蝦夷の唄

京都迄行く味早き走り鮭

鮭さげてハイカラ行くや船場町

初鮭や値も仰々しき走り鮭

網引きや観光団の鮭の味

石狩の花なり鮭の群来しより

初鮭や石狩川の名も高し

樺太の鮭や片身の鼻曲り

大正五年（一九一六）の石狩町の鮭漁獲高は約六万五千尾であった。

水鳥や不漁つゞきに浜寂びて

※右の句は、大正一〇年（一九一六）年の作。この年の石狩町の鮭漁獲高は四万九七〇〇尾であった。

はね返る鮭叩きおる船頭かな 花田蕾宵

※右の句は大正末期の作。本名は花田知也で石狩八幡宮社司。明治三四年生まれで、大正十二年頃から尚古社の社員となる。平成六年没。

石狩は鮭の魚飯に名残あり 大谷句仏

※右の句は、昭和二年（一九二七）作。句仏が石狩の同派寺院の能量寺を宿として布教に務めたとき、詠んだ句である。現在、能量寺境内に句碑が在る。この年の石狩町の漁獲高は 八万四千尾であった。

石狩川

灯ともして秋味舟の流し網 大谷句仏

上川は秋味漁期や鰻魚巢

※右の二句は、昭和三年の句「石狩川」と題し、八月の句である。

大谷句仏は明治八年二月、京都に生まれる。本名は光演、真宗大谷派東本願寺二三世管長。若年の頃から俳句に親しみ、昭和二年より俳句に専念する。はじめ高浜虚子につき河東碧梧桐の指導を受ける。同三八年、中川四明の「縣葵」を引き受け、碧梧桐の新傾向変調後は乙字の援助を受け、乙字没後主宰して京都の歴



能量寺境内の大谷句仏句碑

史ある俳誌として育成につとめ、多くの俳人を出した。昭和一八年二月六日、東京で没。六八才。

明治期サケ漁でにぎわう石狩に花開いた尚古社は道央俳壇の雄として交流は全国に及んだが、石狩川の上中流部の開発に連れて、川は汚濁しサケは激減し街は寂れた。そして、昭和一五、一六年頃に尚古社八〇余年の歴史が閉じた。

『石狩俳壇誌』 前川道寛 昭和六〇年

『鎌田池菱と尚古社』 いしかり郷土シリーズ四（石狩町郷土研究会）平成七年

『いしかり川』 創立三〇周年記念特集号 二〇巻四号 平成一七年一〇月二五日寄稿

九〇年前頃の石狩尚古社「鮭」句会 田中實
『石狩文芸季刊』三巻一号、文学に偲ぶ石狩（稿） 田中實 昭和六三年一月八日

いしかり吟行道しるべ

『俳句のまちいしかり』 石狩市文化遺産活用実行委員会 平成二八年『いしかり暦』第二八号 平成二七年 石狩市郷土研究会

石狩市に残る中央俳壇明倫教會證について 中島勝久
『新聞に見る。石狩・厚田・浜益』歴史年表第四号明治二九年 鈴木ト

ミエ編著 平成二〇年

開通から50年

「石狩河口橋の開通」にまつわる

厚田村・浜益村の記録とできごと

寺尾 陽助

1 はじめに

なんと、令和4年度は「石狩河口橋」（以下、「河口橋」）の開通から50年の節目であることにふと気づいた。

きっかけは、厚田村時代の資料を保存している書庫で見つけた『暑寒別道立自然公園あつた』という16ミリフィルム。

河口橋開通直後の映像で「昭和47年、長い間の願いであった河口橋の完成と国道231号線の整備によって、札幌・石狩がちりちりと結ばれ、厚田村にも多くの可能性を持った新しい希望が生まれたのであります。」というナレーションなど、全編を通し、河口橋の開通により、観光や産業の振興など厚田の発展を期待して制作されたものと推測された。

河口橋の開通による石狩への影響は、なんとなく分かっているが、厚田村や浜益村への影響は、まるで考えたことがなかった。また、石狩市役所に奉職した後、平成31年度から「厚田支所」に在籍していることもあり、せっかくの機会と思い、厚田・浜益の過去広報や当時の新聞記事のほか、地域の方からの聞き取り等により、開通による両村の記録・できごとをまとめることにした。

市の担当から許可を得たので、広報画像等を交えて紹介する。

2 石狩河口橋の開通

まず、河口橋の概要を紹介する。開通は、昭和47年7月20日で、第一期工事終了の「仮」開通になる。船場町側から進んで川を渡ったのち、左に大きく迂回して木製橋を通るルートだった。完成（完全開通）

は、昭和51年8月19日。

国道231号は、昭和28年に未開通箇所を含めて二級国道に昇格したが、予算が十分ではないなど全線開通には程遠かったため、道路の早期完成や河口橋架設を願い、昭和31年6月24日に石狩・厚田・浜益の3町村で国道改良工事促進期成会を組織し、官民一体で陳情を始めた。（『広報いしかり』31・8より）

その11年後の昭和42年に工事がようやく始まり、さらにその5年後、待ちに待った開通当日を迎えた。それまで渡船が両地区唯一の移動手段だっただけに、当時の新聞報道や広報からも喜びあふれる様子が伝わる。（渡船は昭和53年3月31日に終航）

なお、石狩河口橋の橋長は、1,412.7m。当時は北海道最長の橋梁だった（一般道では今も最長）。風が強い地域なので、耐風安全性に配慮した設計になっている。

開通当日は、約400人が集まり、10時30分に渡橋式が行われている。五段雷の打ち上げ花火のあと、テープカット・くす玉セレモニーがあり、大きな拍手に包まれる中、代表して親子3代・夫婦2組の町民12人が渡り初め。陸上自衛隊・地元小中学校プラスチックバンドのほか、開校90周年（昭和38年8月）にあわせて誕生した石狩小学校鼓笛隊の演奏がムードを一段と盛り上げた。

（『北海道新聞』7・20夕刊より）



【渡橋式】

『広報いしかり』47・8表紙



【トラクターも参加】



【渡り初め】



【石狩小学校鼓笛隊】



【祝賀会：青少年センター】

この渡橋式には、厚田・浜益の村長も列席。河口橋開通の前年には、国道231号未開通部分の内、厚田・浜益間が開通するなど、両村も大きな変化を迎えた時だったといえる。

3 厚田村の記録とできごと

(1) 開通まで

昭和40年6月7日（広報で確認できる最も古い記録）札幌〜留萌線現地踏査（昭和）43年度貫通をぜひ実現しよう。国道札幌留萌線開発促進協議会（会長は留萌市長）が建設省（現在の国土交通省）や北海道開発庁の関係者を招いて、全区間の現地踏査を行った。（『広報あつた』40・7より）

※この時の一団の行程は、石狩川渡船を経て厚田まで、その先は国道未開通のため、船に乗り換えて濃昼まで、そこから送毛山道を越え、浜益茂生（もい）に到着し、再び船に乗り、船上から雄冬まで視察と、かなり過酷である。



年頭号の村長あいさつでは、毎年、国道改修、河口橋架設にふれていることから、大きな期待が感じられる。

順調に進む夢のかけ橋 完成によって、近年著しい都会への人口流出の歯止めとなるか？（『広報あつた』44・10より）



順調に進む夢のかけ橋 石狩河口橋工事

河口橋取付道路の分岐点から嶺泊まで一部（望来坂）を残して舗装化される。（『広報あつた』46・4より）

厚田八幡沢別荘分譲地すでに売り切れ 契約のほとんどが東京人で、今後の村づくり計画を進める上で不利なことにつながる



※分譲地は、厚田支所のすぐそばだが、未開発のまま。

昭和46年11月5日 国道231号の厚田・浜益間が開通。滝ノ沢トンネル入口で開通式、ルーラン海岸で記念碑除幕式のほか、祝賀会※が盛大におこなわれた。

（『広報あつた』46・12より）

※祝賀会では、厚田名物として「ハタハタのデングク」が振る舞われている。一般的な食べ方ではないそうだが、厚田にある戸田旅館で提供されていたようだ。

厚田総合開発計画を答

申 陸の孤島視された厚田も、ようやく脚光を浴びる時節がやってきた。河口橋開通は確定し、札幌生活広域圏としての厚田の役割もおのずと明らかになり、全力を挙げて邁進せねばならない。(『広報あつた』47・4より)



昭和47年7月10日～19日 河口橋開通等で車両の増加、海水浴客・釣りファンの入込激増による交通事故の多発が予想されるため、交通安全運動旬間実施。(『広報あつた』47・7より)

(2) 河口橋開通から昭和49年度末まで

昭和47年7月20日(開通当日) 札幌直通バスが運行された。札幌まで1時間30分。(『広報あつた』47・7より)

厚田も札幌の通勤圏としてクローズアップ。柳村長は「札幌の食糧供給基地としての厚田の位置づけがはつきりした。生鮮食料品をピストン輸送し、関連産業も誘致しなくちゃ」と早くも飛躍に思いを凝らしていた。(『北海道新聞』7・20夕刊より)

石狩や厚田は、住宅建設やレジャー資本進出も目立ち、大きく変貌

を遂げようとしている。(『北海道タイムス』7・20夕刊より)

昭和47年7月21日 開通に伴い、中央バスが直行バス3本の運行を開始。厚田行8時30分/10時50分/濃昼行13時35分、札幌行11時00分/14時30分(濃昼発) 16時05分で、料金は厚田まで290円、濃昼まで360円。(『北海道タイムス』7・20夕刊より)

昭和47年7月23日 目を丸くするガソリンスタンド従業員「朝から車が切れ目なしですわ。こんなこと、開びやく*以来」

※開びやくとは、天と地が初めてできた時。世の始まり。という意味。(『北海道新聞』7・24より)

すさまじい人と車 7月23日 2万8千人、30日2万5千人が訪れ、国道・空地はもろろん、軒下にも車が連なり、ちよつとしたパニック状態(『広報あつた』47・8より)

厚田にゴルフ場 三井不動産

がレジャー進出、望来にゴルフ場を経営。国道231号の整備が進み、河口橋開通など、札幌中心部から車で20～30分の距離となり、隣接の石狩町花畔地区を中心に住宅団地も造成されるなど立地条件に申し分ない。詳細は明らかではないが、国道沿いの民有地約170haを買収し、昭和49年春オープンをメドに工事。(『北海道新聞』8・4夕刊より)

※このゴルフ場は、昭和49年5月23日にオープンした聚富の「太平洋クラブ札幌コース」のことと思われる。



「孤島」から解放されて海水浴客ラッシュ 想像以上の海水浴客が殺到。海岸近くの空き地をほとんど占領し、11ヶ所の公共トイレも常に使用状態。昨年まで1日7〜8千人だった人出は、5〜6万人となり、まちの様子は一変している。

望来では、渇水期で簡易水道の水量が少なく、住民が給水制限しているところに「水が欲しい」と頼み込まれ、断れず提供（昭和52年に簡易水道拡張の記録あり）。こんぶ、ヒヨリ貝、アワビの密漁も増え、漁師もお手上げ状態。反対にホクホク顔は、浜の売店者と商店街で、飲料水は飛ぶように売れ、商工会は、7月20日に「ソーランもち」「あつもち」を土産物として新発売し、商魂たくましいところを見せている。（↑北海道タイムス8・8より）

昭和47年8月13日 水の犠牲、高波で2人不明。安瀬（やそすけ）茶志内海岸の岩場付近で札幌市の20代会社員が高波にさらわれる。小谷村の通称アオシマ浜で札幌市の20代会社員が沖から30メートル付近で行方不明。（↑北海道新聞8・14より）

昭和47年8月17日 札幌の周辺自然保護緑化懇話会の今田会長らが厚田を訪問。植太一校長※らと話し合い、すでにゴルフ場計画が3つあることを知り、観光企業の出足の速さに驚く。「役場が情報をつかむ前に、民有林が買収されていた」というが、漁業がさびれ、立地条件を生かした観光事業しか生きる道がないとの考え方もあり、全面的に否定しているわけではないようだ。（↑北海道タイムス8・18より）
※植太一さんがこの学校長だったのか確認できませんでしたが、もしかすると「柳太一村長」の誤りかもしれません。

中央バスの厚田6時30分発運行。海水浴客の入込数は、予想をはるかに超え、車は1日平均1万台超、計30万人以上とみている。（↑『広

報あつた』47・10より）

そさい供給基地への飛躍 大消地札幌をひかえ、そさい（野菜のこと）づくりが聚富砂丘地をはじめ、全村的な気運。

（↑『広報あつた』47・11より）

新春座談会 札幌との接近は、厚田に大きな転換を迫ると共に、そのまま将来の発展の光明。札幌の食糧供給基地、レクリエーション施設整備、特色ある産業の育成、観光漁業（磯船、鯉のつかみ取り）、大型レジャー施設の誘致、「石狩湾新港」の後背地としても大きな役割を果たす。（↑『広報あつた』48・1より）

昭和48年4月1日 厚田村土地開発公社が4月1日に発足。

昭和48年5月1日 厚田村観光協会が発展的解消となり、厚田観光協会として再発足。（↑『広報あつた』48・5より）



『暑寒別道立自然公園あつた』（石狩市民図書館所蔵）



パンフレット1万2千部作成、海浜を中心に海水浴場、キャンプ場、釣り場など、観光厚田を紹介（左上写真）。観光協会では、こんぶを加工した土産物を用意し、売り出す。（『広報あつた』48・8より）

昭和48年7月28日～29日 商工会が交通安全協会の協力で、今後の観光レクリエーション客の動向把握と今後の発展の方策を探るため、土・日に自動車通行量調査を実施。2日間の入込客は約4万7千5百人で、内4千8百人余がキャンプ、民宿旅館等で一泊したが、車の約43%が浜益方面に走り抜けていることがわかり、今後の厚田を示唆。

（『広報あつた』48・11より）

昭和49年7月17日 厚田村海の家「かじか荘」オープン。海水浴シーズンだけではなく、諸会合、宿泊等、村内外の人々に活用される。

（『広報あつた』49・8より）

『暑寒別道立自然公園あつた』（昭和49年）
石狩市民図書館所蔵



(3) 厚田村にとっての河口橋開通

別荘在住の村の元職員に当時のことを尋ねると「仕事が終わってか

ら札幌まで行けるようになった。」と懐かしみ、望来在住の築田敏彦さんは「それまでの厚田は、まさしく陸の孤島だった。札幌までは、いしかり渡船で2時間もかかっていたが、河口橋の開通でかなり楽になった。」と話していた。

また、望来で農業を営む高田恭宏さんの「開通前は、札幌の市場に野菜を出荷できなかったもので、稲作一本だった。開通してから野菜を作るようになり、収入が安定した」という話からも、利便性だけではなく、住民の生活の質が高まったものと推測する。

昭和50年代には、飲食店が倍増したほか、檜の郷展望台（50年・下画像 ※現在の恋人の聖地）、戸田記念墓苑（52年）、岩見沢市青少年海の家（54年・別荘の高台）、みよし園（54年）、キャンプ場（54年）、厚田公園（55年）といった観光施設などが次々に完成している。

また、行政主体の動きにとどまらず、札幌との近さも理由にあるのか、「民間資本」で観光開発（ゴルフ場・海水浴場）、宅地開発（別荘用地など）などが進められたのも大きな特徴だろう。

ただ、その後も人口流出は続き、昭和45年の404人から、50年3614人、55年3207人、60年3046人と緩やかに減少している。

4 浜益村の記録とできごと

(1) 開通まで

昭和40年6月7日 浜益の広報に残る最も古い記録は、厚田と同様「札幌～留萌線



の現地踏査」になる。だが、記事の扱いは、比較的小さめ。

(『広報はまます』40・8より)

昭和41年12月1日 中央バスが、幌地区(6時発)と当別(9時5分着)間の直行バス1往復の運行を開始。当別で9時20分のバス、汽車に連絡。(『広報はまます』41・12より)

進む国道村内線の工事 浜益内国道の舗装が進んでいる様子を掲載。(『広報はまます』42・7より)

年頭号では毎年、国道231号開通への期待にふれているが、浜益の場合は、河口橋ではなく、浜益・厚田間の開通について。このことから、まず、厚田と自由に行き来できることを期待していたと推測される。

「(厚田・浜益線の)開通で観光浜益が脚光を浴びることになり、未開発の分野で期待。(『広報はまます』46・3より) ※浜益では、当時、全国で広く行われていた「観光診断」を依頼するなどして、この年は海水浴場の整備に重点を置くことが記載されている。

昭和46年11月5日 開通により一番近い距離にあった厚田が、いままでは、他



人のように何の交流も考えられなかったものが、一変に全く隣同士になりました。

(『広報はまます』46・12より)

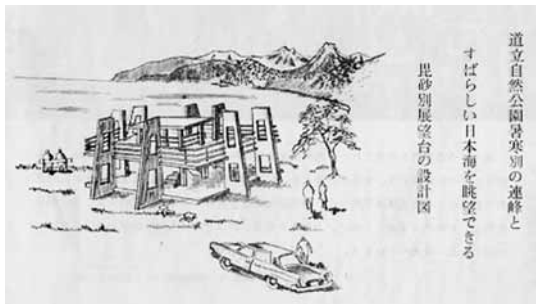
※元職員は、札幌に行くにしても、結局、渡船は時間がかかり、浜益にとつて開通の効果はそれほどなかった。かえって、厚田・浜益両方に用事のある道庁職員などは便利だったのではと話していた。

40万人が想定される海水浴客の受け入れに向け、1月、役場に観光開発室を発足して、観光構想の具体的な青写真を作りたい。

(『広報はまます』47・3より)

眺めのよい毘砂別の高台に展望台(左イラスト)を作り、川下海水浴場とあわせて、砂浜ときれいな海水の浜益の海の宣伝に努める。

(『広報はまます』47・5より)



下：完成した毘砂別の展望台

(2) 河口橋開通から昭和49年度末まで

昭和47年7月20日(開通当日) 「陸の孤島」といわれる浜益は札幌と車で約1時間20分に短縮。不通区間の雄冬岬の道路(浜益・増毛間)完成の昭和54年には、同橋がもたらす経済効果は計り知れないと大いに期待。

中越村長は「昨秋には沿岸の送毛峠ルートも開通し、札幌との間が縮まったが、河口橋の開通は、さらに20分以上短縮してくれる」と地域の産業・経済発展に大きくプラスすることを強調。

(北海道新聞7・20夕刊より)

昭和47年7月21日 村民長年の夢、札幌・浜益間直通バスが運行を始めた。午前7時55分発札幌行き第1便が発車する際、盛大な運行式でスタートを祝った。

関係者約50人が出席。打ち上げ花火を合図に中越村長と中央バスの加藤滝川営業所長が紅白テープをカットし、倉内運転手と横山車掌に花束が贈られた。第1便には、出張の村職員、運行を機会に札幌まで出かける老夫婦、商店主など約40人でほぼ満席。浜益行16時30分(19時00分着)、札幌行7時00分(9時36分着)、料金は550円。(『広報はまます』47・8 / 北海道新聞7・22より)

※元職員によると、バスルートの「送毛・毘砂別線の峠」は、道が狭く、通称「七曲り」と呼ばれる連続カーブの難所なので、腕に自信のないバス運転手に代わって運転するベテランが待ち構え、峠だけ運転していたようだ。冬は、今のようには4Dワ車じゃなかったたので、滑って登れない車も



いたらしい。

昭和47年7月23日 「やっぱし、石狩河口に橋がかかったおかげ。札幌からどんどんお客さんがくるべ、と期待をかけていたとおり」とニンマリする観光協会幹部。望来から浜益の川下海水浴場に向け、札幌からの車ばかり。「せっかくのお客さんを事故にあわせては」と、観光協会の幹部たちは、駐在さんと手わけして交通整理に汗を流していた。(北海道新聞7・24より)

昭和47年7月25日 この年に政令指定都市となった札幌が、自然の息吹に肌で触れる機会の少ない市民へのプレゼントとして、毘砂別に「青少年海の家」を設置。ただし、開設を1年繰り上げたので施設が



使えず、仮施設のテントでオープン。8月11日まで小中高校生が200人ずつ宿泊する。

第1陣は、児童会館に通うちびっ子・札幌南校生らで、午前10時にバスで大通公園を出発し、正午頃に到着。市消防局音楽隊のファンファーレが響き渡り、浜益中央小6年生が歓迎のあいさつ。これに答えて、澄川小6年生が「札幌に海ができてうれしい」とお礼の言葉。気温28℃・水温21℃。中越村長らは「これほど喜んでもらえるとは…。子供同士の友情を深めることにもなるし、観光地として売り出すきっかけにも」とご満悦だった。(『広報はまます』47・8/北海道新聞7・25/7・26より)

※浜益側は、村長・教育長・観光協会・地元議員・地元自治会等で構成する協力を立上げ、運営に協力をしてきたと記録されている。ピーク時に8千人が利用したが、平成17年に老朽化と利用者減少で閉鎖された。なお、取り壊されていないので、今も国道沿いから建物の外観を見ることができる。

7月に40万人、観光地化へ夢はずむ
知床にも勝ると言われる秘境のイメージが人を誘い、姿を消したニシンに代わる車と人の「群来(くき)」。昨秋開通した長いトンネルを過ぎると浜益。すでに舗装は途切れ「泣いて別れた送毛峠」と浜益音頭に歌われる難所は車の数珠つなぎだが、眼下に広がる海の青さが疲れた目をいやす。目的地まで1時間50分。土日は、少なく見積もっても7〜8万人の観光客。「未



『はまますの観光』
石狩市民図書館所蔵

開の秘境、魅力あふれる自然美」をキャッチフレーズに、観光協会とタイアップしてパンフレット(下画像)を作成、約40軒の民泊リストを用意し、受入態勢を作った。ヒヨリ(ヒル)貝でもてなし、地物コンブを刻んだ土産菓子も売り出されるようになり「村に働き場所ができれば、出稼ぎにいかないで済む」と過疎から浮上するチャンスが来たとの声があちこちで聞かれた。(北海道新聞8・9夕刊より)

昭和47年8月9日 送毛の国道で、札幌市東区の会社員の運転する乗用車が約40mのガケ下に転落し、札幌香蘭高(現在の山の手高)2年生など4人が怪我。現場は、通称「百曲がり」と言われる連続カーブの山道。夏休みを利用し、浜益海岸まで海水浴に行く途中だった。(北海道新聞8・10より)

毘砂別橋の拡幅工事 あわせて毘砂別道路の改良・舗装化工事を実施。(『広報はまます』47・9より)

秋晴れの10月26日、歴代の元石狩支庁長13名が郷土資料館を訪れる にこやかに郷土資料館前で記念撮影の一行(『広報はまます』47・11より)



歴代の元石狩支庁長13名
郷土資料館を訪れる
秋晴れの10月26日

今年度の観光事業で財政の許す限りの開発と施設整備、産業の誘致を積極的に求める 1. (毘砂別)展望台の完備/小公園を造成/2. 群別桜の園/二年計画で完備する/3. 観光トイレ/新たに三カ所新設/4. 海水浴場の整備/5. 駐車場の新設/6. ユースホステル施設の建設(『広報はまます』48・4より)

昨年（昭和47年）の観光客40万人、今年は、海の家オープンなどでさらに増え、50万人というもっぱらのうわさ。青少年海の家は、7月25日から8月12日の第1期で約5千人が利用。（『広報はまます』48・9より）

昭和48年12月21日 国道231号の床丹・千代志別間が開通。昭和39年に始まり、土砂崩れで8人が死傷するなどの難工事だった。（『広報はまます』49・2より）

（3）浜益村にとつての河口橋開通

元職員で助役の神田一昭さん（幌在住）から「河口橋開通による期待はとても大きかった。通勤・（石狩までの）通学、高度医療機関への通院などが可能になり、日常生活は一気に便利になった。村外から多くの人が訪れ、地元店が活性化された。漁協が鮮魚を新鮮な状態で札幌の市場まで運ぶことができるようになったり、果樹園にも札幌から大口の注文が入ったりするなど、生活の質も向上した。」といった当時の様子を聞くことができた。

昭和50年代には、ホタテの養殖を本格化（55年）、ふるさとあきあじまつりスタート（58年）、温泉開発成功（59年）といった話題もあるが、事業の中心は、送毛・毘砂別間新道開通（51年）、千代志別と他地区・滝川間の直通バス運行（52年）、千代志別・雄冬間開通（56年）、摺鉢山スキー場開設（57年）、各地区に集会所設置など、生活インフラの整備に関するものがほとんどで、厚田のように民間資本が入



り込んだ記録を確認できなかった。

村内の地区同士がようやくくつながることから、充実した生活を送れるよう、各地区に必要な機能を整備し、定住性を高めるための事業を行う（『広報はまます』56・4より）という言葉からも、生活環境の質を高めることが最優先だったのかもしれない。

なお、浜益の雄大な自然美を楽しんでもらうこと自体をウリとした観光施策は、過去の統計などから海水浴入込客数が順調に推移していたことが分かる。

しかしながら、人口流出は止まらず、昭和45年5890人、50年4820人、55年397人、60年3327人と減少を続けた。

また、国道231号の全線開通（昭和56年）を2部構成で紹介している記録映像『浜益を北へ！国道231号』（開発局）には、昭和50年代の浜益の様子が映っている。市教委（社会教育課）がYouTube上で公開しているので、ぜひご覧いただきたい。

第1部（昭和52年）



第2部（昭和56年）



5 終わりに（寄稿のきっかけになった映像について）

冒頭で紹介した映像『暑寒別道立自然公園あつた』は、タイトル以外が「景山プロ／昭和48年11月9日」の表示のみ。（下が実際のフィルム）

厚田村時代の公的な映像は少なく、50年前の様子が分かるこの映像を活用しようと思ひ、著作権を所有していると思われる景山プロを調べたが、すでに会社は存在しない。当時在籍していた村職員にも、映像をご存知の方がいなかった。

このままだと、著作権が切れる年（公開から70年後）を待つしかないのです、情報をお持ちの方は、ご連絡ください。

（映像をいくつか画像で紹介します）

上から 映像タイトル／「企画 厚田村」のテロップ／石狩河口橋



上から ルーラン海岸／錦鯉の養殖(発足)／海岸草原での乗馬(聚富)



謝辞

急な依頼にも関わらず、当時の貴重なお話を聞かせていただいた厚田区の高田恭宏さん・築田敏彦さん、浜益区の神田一昭さんはじめ、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

協力・写真及び画像提供 石狩市、石狩市教育委員会

引用・参考文献

『厚田村勢要覧』（厚田村・1973、1975、1977、1983）

『浜益村勢要覧』（浜益村・1977、1979、1985）

『人間回復宣言・クローズアップはまます』（浜益村・1989年）

三浦 宏 『石狩川の橋物語』（石狩川振興財団・2006年）

鈴木絃男 『あつたの歩み』（石狩市厚田区・2006）

『札幌市野外教育施設利用のご案内』（札幌市教育委員会）

山田文右衛門履歴

山田實丸

大正八年七月十二日

小樽区汐見台町二十三番地

山田實丸^印

北海道庁道史編纂掛御中

史第二十九号（大正八年五月三十一日付）及史第三十四号ヲ以テ御照会ニ相成候道史資料トシテ御必要ノ旨ヲ以テ、当山田家ニ関スル略歴等ノ儀ハ、其本宅タル山田ハ福山町ニ於テ火災ニ逢ヒ、蔭宅タル箱館モ亦火災アリシヤニテ、文化時代ノ文右衛門ニ係ル事跡ハ更ニ記録ヲ存セス。

又第二ノ中興タル文右衛門（清富）ノ事績ニ付テモ完全ナル記録アルニアラス、只生存當時ノ嫁女トシテ又臨終當時其看護ノ任ニ当レルツネ（現在ノ母）ノ文庫中ヲ探リテ得ラレシノミノモノヲ以テ、別冊ノモノヲ蒐集致シタルモノニ有之候其所口碑ニ遺レルモノハ尚多々アリト雖モ正確ナル證左ヲ得ルニ難キヲ以テ記述不仕候。右不取敢御答申上候也。

追テ第十六代文右衛門小肖（写真）保存致居候ニ付一葉提出致候也

第十六代

山田文右衛門清富小肖



左ノ一篇ハ第十六代文右衛門（清富）ノ手記ニ係ル系譜ノ写ニシテ、其本系譜ハ其後福山町唐津内本宅ノ火災ニ罹リシトキ共ニ文ヲ失ヒシト言フ。

山田家系譜略記

按スルニ山田氏今ニ至ル己ニ二十六世ヲ経、其先ハ能州神代村ニ住ス、第九代市良右衛門北海ニ移リ福山城下唐津内町ニ住ス。初メ栖原家ニ仕事シタリシカ後代船ト漁ヲ以テ兼トシ祖父ノ時大ニ勃復興シテ家ヲ成セリ。

實丸曰「此祖父トハ文化年代ノ文右衛門トス」

近代祝融ノ為メニ侵サレ家乗ヲ失ヒ歴世ノ事跡ヲ審カニスル能ハス。僅カニ檀越ニ請フテ過去籍ヲ探リ以テ推考ニ資ス。

慶応元丑年七月 第十六代山田文右衛門清富 誌

第九代 市良右衛門

寛永六巳年能州神代村ニ生ル、其北海ニ移住シ来レルハ何年頃ナルヤヲ知ルヘカラス 法名ヲ心光院淨安日教信士ト謚リ元禄七年十一月朔日亡、世寿六十六歳 妻 名不詳 受円院妙遊日寿信女 元禄四年十月十日亡

第十代 文右衛門

先代市良右衛門ノ養子、酒井伊左エ門ノ一子明暦元年五月三日生、法諡法住院持戲觀理居士、享保三年六月二十七日亡、世夢六十四歳。 妻 法諡本光院妙長日理信女 亨保四年八月十五日亡

第十一代 文右衛門

先代文右衛門養子笹森左治兵衛ノ子ナリ。貞亨二年三月五日生

法諡見了院秋月日翫居士、延享三年八月晦日亡、世寿六十二歳
妻 第十代文右衛門女、母ハ本光院 法諡直道院妙行日場信女
安永二年正月十五日亡。世寿七十二歳

第十二代 喜右衛門

第十一代文右衛門養子ナリ。実父曲師喜之助（能谷利右衛門家也）正徳二年五月十日生、法諡釋淨円、安永九年四月十六日亡、世寿六十九歳

妻、勘 十一代文右衛門女 母直道院 宝曆七年八月廿日亡
後妻 嶋 全 全

元松前家邦広院様ニ待シ「榊」ト称セリ。

第十三代 文右衛門

第十二代喜右衛門養子実父阿部又市、元文元年二月十五日生、法名釋道緝、寛政九年九月二十日亡、世寿六十二歳

妻 美津、十二代喜右衛門女 母勘 文化元年六月二十八日亡。

第十四代 文右衛門 有智

幼名吉左郎、家ヲ継キテ文右衛門ト唱ヒ隠居シテ喜右衛門又喜翁ト云ヘリ。第十三代文右衛門ノ長子、母美津、宝曆十二年七月十八日生、法諡釋唯

常、文政十三年九月二十日亡 世寿六十九才

妻 澤 南部蛸崎布施氏

○ 弟 保寛 早世ス

○ 弟 房寛 市良右衛門家ヲ立ツ

○ 弟 仁右衛門

○ 妹 順

（原注・山田家中興、家業大ニ挙ル、藩候特遇ヲ結ヒ苗諱、

帯力ヲ許サレ終ニ後世子孫ニ逮フ。實丸曰、此仁右工門家ハ現在浦河ニ住スル山田富太郎ノ先トス）

第十五代 文右衛門 喜長

第十四代文右衛門ノ長子、幼名房吉、母ハ澤、布施氏ナリ、寛政十一年四月廿日生、若クシテ江戸深川ニ移リ住ス。法名釋敬寿、天保十三年二月二日亡、世寿四十四才

妻 佐和 江戸日本橋萬町村形吉兵衛 長女

○ 弟 文吉、山田仁右衛門ニ養ハル。

第十六代 文右衛門 清富

幼名文治、先代喜長ノ養子、実父ハ山田市良右衛門房寛（十三代文右衛門ノ二男保寛ノ長子）母理与、吉田氏 文政三年八月十日生法名釋貞観、明治十六年九月十二日 亡（勇扨村）世寿六十三才

妻 直 福山、西村茂右衛門 四女

（原注・第二ノ中興勇扨村ニ於テ死ス。）

實丸曰ク 山田家ノ中興トシテハ第十四代有智ヲ以テ其祖ト仰カサルヲ得サレトモ、中興トシテノ実効ヲ奏センハ第十六代清富ナランカ、其有智ノ死セシハ清富十一才ノ時ニシテ、喜長ハ江戸ニアリテ家業ヲ見ス、終ニ天保十三年四十四年ヲ以テ畢ル。故ニ清富長シテ特ニ絶エナントスル家業ヲ再興セリト推セラル。故ニ記録ノ上ニ於テ第十四代有智所謂文化ノ業ハ完全ニ伝ヘラレス。又十六代清富ノ時ニ於テ取捨ヲ為シ大整頓ヲ計リシヤニテ、持漁場各所ノ支配人ニ達セシ家法取締等ノ手記セルモノ筐底ニ遺サレアリ。如此ニシテ祖業ヲ継キ旁々自己精勵ニ発スル開剣進ンテハ、樺太ニ迄モ自身長征ヲ試ミタル等、頗ル事蹟ヲ有ス

ルモノ、如シ。若シ清富ニシテ今人タラシメハ其記録ヤ頗ル棟牛郷ヲ極メタリシナラン。惜ムラクハ古人物事ニ淡ナリシヲ。

弟 嘉長 箱館ニ別家ス（隱宅ナリ）

弟 寿兵衛 箱館別家嘉長死後全家ニ住ス。

長女 友 仁右衛門ニ養ハレ仁右衛門ノ嗣富右工門ノ妻トナル。

長男 壹治郎 江戸深川ノ隱宅ヲ相續ス。

二男 豊左郎 早世

二女 茂登女 ヌ

三女 満寿美 富右衛門後妻。

三男 文治 家ヲ繼グ

四男 文作 早世

四女 ヨシ 現存者 石狩山田治兵衛妻。

（原注・實丸曰ク、満寿女ハ浦河現住山田富太郎ノ母タリ）

第十七代 文治 清次

文右衛門清富三男、母ハ直、西村氏 嘉永二年七月九日生、明治三十一年九月八日石狩町聚富ニ於テ亡ス。世寿五十歳

妻 ツネ 現存

第十八代 ツネ

第十九代 實丸 養子妻ソウハ文治ノ三女

實丸曰

第九代市良右衛門能登神代村ヨリ移リテ福山城下唐津内町ニ住シ、第十四代文右衛門大ニ振ツテ家ヲ興シ産ヲ殖ス。此時江戸深川ニ穩宅ヲ設ク。又藩主ハ苗諱帯力ヲ許シ此儀世襲子孫ニ及フ。第十六代文右

衛門箕裘ヲ継キ再ヒ家ヲ興ス。此時居ヲ福山ヲ本宅トシ、箱館弁天町ニ穩宅ヲ置キ江戸深川ヲ以テ別家ノ格トス。其文右衛門ノ死シタルハ勇弘村ニシテ、文治夫妻ノ膝ヲ枕トシテ世ヲ終ル。此人主典格ヲ以テ遇セラレ、又明治十四年左大官御賞詞ヲ受ケシ等晩年ヲ飾ルモノ多々アリシ。

山田文右衛門

其方儀父祖ノ遺業ヲ継キ漁場數ヶ所ヲ新設シ、網製ヲ改良シ、且ツ石ヲ海ニ投シテ昆布ヲ繁生セシムルノ新法ヲ發明シ、国益ヲ改ス条奇特ノ至リ尚此上可致勉勵候事。

明治十四年九月六日

左大官 熾仁親王

用紙「大政官」漉込鳥ノ子紙縦七寸五分横

一尺二分。

水産博覧会

函館縣下 函館区弁天町

山田文右衛門

北海漁業 漁場ヲ開設シ網製ヲ改良シ以テ公共ノ便益ヲ裨ク。殊ニ石ヲ海ニ投シテ昆布ノ蕃殖ヲ図ルカ如キ利沢地方ニ治シ其功勞大ニ嘉賞スヘシ。

岩島 匡微

小野 職愨

河野雄二郎

審査部長從七位

松原新之助

審査長從五位勲五等

田中 芳男

右ノ薦告ニ抛リ賞牌並ニ金貳拾円ヲ授典ス。

明治十六年五月三十一日

農商務卿正四位勲一等 西郷従道

○鳥從四位殿石狩詰タリシトキ文右衛門ハ權少主典トシテ遇セラレシト（現存者山田治兵衛其ノ他ノ談話）

○札幌創成川ヨリ西（南一条西一二丁目）ニ於テ地所ヲ受ケ拓キテ山田町ト言ヒシト（旧名トシマ通り）

○千歳本流エベツフト上一帯ノ漁業ヲ営ミシハ第十四代文右衛門ニ始マリ第十七代文治迄伝ハル。

（文治比較的早世ナルト嗣子ナクシテ婦女子ノミナリシカ故ニ家傾クニ至ルカ惜ヒ哉）

○黒田次官殿時代勇払漁業鰯ノ外、陸上ニハ馬ヲ放牧シテ太ニ効ヲ奏ス。

○千歳ニ於テハ鮭漁ト馬ヲ放牧ス。

○幌別ニ於テハ鮭、鱒、海草、等、

○勇払ノ馬四百頭ヲ勇払、千歳、苫小牧ノ三ヶ所ニ分置放牧ス。

○苫小牧ハ山田文右衛門清富開拓ニ関与シ力アリシト

○千歳ヨリビビ込通路ヲ開キ牛馬車ヲ開井テ鮭ヲ運ヘリト（其頃ノエ

サリプトハ三統三千石、千歳ハ会所前二千石ノ収獲アリシト）

○北海道史第一

（五〇〇頁）ビビ千歳間、千歳漁太漁ノ道路ハ文右衛門ノ開鑿ニ係ルトノコトナリ。

（八五七頁）運上所ヲ置キ山田寿兵衛宅ト言フハ文右衛門ノ宅ナリシト、其寿兵衛ト言フ人ハ文右衛門清富ノ実弟ナリ。

山田文右衛門

代粹 文治（印影）

山田文右衛門

依願勇払千歳兩郡驛通取扱並ニ漁場持居免候事。

明治八年四月七日

民事局

山田文右衛門

山獵取扱差免候事

明治八年五月七日

民事局

左ノ一篇ハ文右衛門清富ノ手記ニ係ル手船ニ関スル控帳ヨリ指書ス。

一

左ノ一篇ハ各漁場支配人等ニ示セル規定様ノ中ヨリ指書ス。

漁場

支配人

勇払

初

山田屋

金兵衛

及各地場所々々にて

後

山田屋

仁右衛門

ヲタルナイ。イシカリ

元番屋

忠左郎

アツタ

元番屋

伝九郎

「開拓

廻漕 御用取扱

手船			
船名	新造年	御上表 乗組人員	積高
奉徳丸	不詳	四人	百五十石
願力丸	〃	〃	〃
豊秋丸	〃	八人	四百五十石
順吉丸	〃	十二人	八百石
順悦丸	文政九年	十四人	千百石
順願丸	天保元年	十一人	七百石
豊福丸	天保十四年	十六人	千五百石
豊風丸	弘化元年	〃	千五百石
豊一丸	弘化元年	十七人	千五百石
			船頭
			文治郎
			宇吉
			助右衛門
			弥右衛門
			民藏
			松右衛門
			權之助
			要右衛門
			曾兵衛

アツタ
元番屋
伝九郎

ヲタルナイ領ポントマリ

壱ヶ所

一、建網鮭場
元松前浦田屋久吉持場

ヲタルナイ

一、壱ヶ所

元（正印

アツタ

一、数ヶ所

ニテハ発見スルコトヲ得ス。
以上ノ外天塩其外ニモアリタルヤニ口牌ニ遺ルト雖モ記録中

左ノ一篇ハ石狩鮭場所ニ関する書類ヨリ抜書ス。

一 石狩鮭引場ヶ所左ノ通り。

一 東浜大網

山田文右衛門

一 西浜

御役所

一 ホリカムイ

山田文右衛門

一 ワツカオイ

全人

一 テイネ

御役所

一 トクヒタ

一 ヤウシバ

イシカリ 土人網

一 マクンヘツ

イシカリ和右衛門

一 下モスンレツプ

平原 平右エ門

ヲタルナイ領ハルウシ。
一、挿網鮭場

但シ元杉山屋又兵衛持場ニシテ引受以来山田寿兵衛（清富実弟）
名目トシ（田印ヲ用ユ。）

ヲタルナイ、フレシユマ

一、壱ヶ所

タカシマ領ノ内テシヤ

一、建網鮭場

壱ヶ所

但シ元大畑屋徳十郎持場引請以来、メ一印ヲ用ユ。

一、	中モスレツプ	二統	山田	文右衛門
一、	上モシンレツプ	一統	佐藤	広右衛門
一、	マクンベツ下向	二統	イシカリ	幸吉
一、	シヒシヒウシ	六統	〃	宇兵衛
一、	下トウヤウシ下	二統	〃	土人網
一、	ウツナイ下	一統	〃	周吉
一、	ウツナイ	〃	〃	土人網
一、	ウツナイ	二統	〃	万六
一、	上トウヤウシ	二統	澄藤	廣右衛門
一、	上トウヤウシ上	二統	山田	文右衛門
一、	下ハナンクロ	一統	レフンツカ	金兵衛
一、	〃	一統	錢函	源吉
一、	〃	一統	イシカリ	新藏
一、	〃	〃	ヲタルナイ	石五郎
一、	ハンナクロ	二統	イシカリ	山田文右衛門
一、	ヲタヒリ	一統	イシカリ	藤吉
一、	〃	三統	〃	土人網
一、	ハラトウラ井	〃	〃	御役所
一、	サツポロヒト	六統	イシカリ	土人網
一、	サツポロ奥	一統	〃	八左衛門
一、	下ベケトシカ	二統	ヲタルナイ	三太郎
一、	ヒトエ下	一統	イシカリ	平藏
一、	ヒトエ	二統	横山	喜藏
一、	〃	一統	山田	文右衛門
一、	ホンヒトエ	二統	イシカリ	常太郎
一、	トウヘツフト	一統	〃	庄兵衛
一、	トエヒラ	二統	イシカリ	宇兵衛
一、	タンネヤウシ	一統	〃	作左郎

一、トママタエ 一統 山田 文右衛門
一、ツイシカリ下向 二統 〃
一、同ホンヘケレ 一統 〃
一、同 〃前 一統 〃
一、同 〃上向 一統 〃
以上 漁場 四拾壹ヶ所
網数 九十三統
右 明治三年八月写

左ノ一書ハ山田文右衛門(清富)ノ手記セシ所ニシテ函館支庁へ提出セシモノトス。

今般札幌へ御行幸ノ御儀ヲ以テ函館御支庁御掛リ四等属村尾元長様ヨリ区長ヲ経テ御演達アリ。至急ヲ要シタルニ依リ大略ヲ書シ御答ヲ為シタリ、則チ左ニ

御答奉申上候書付
開拓使
函館区弁天町二丁目籍
山田文右衛門

一 私儀
先祖共ヨリ当全島東西各国郡漁業渡世ニ付、若年ヨリ郡々ノ内へ数年来海陸往復仕り来り候而、常ニ心掛ケテ海辺及大小出岬ノ場所々々ノ海中ニハ、愚昧ナカラ数度入念検査致候処、其現地左右沖手ノ方トモ従前ノ根儀相備ハリ、海草類及昆布ノ儀ハ何レモ生育シアルコトヲ認メラレ候。抑々昆布物産ノ儀ハ旧来御国地ニ於テ諸国一般食用タルハ勿論、作物肥シ等ニ致来り候物品ニシテ過ル安政万

延ノ度ヨリ外国人買進ミ追年代価騰貴致候ニ付、愚考ナカラ研窮ヲモ致度、私経営ノ胆振国勇払、日高国砂流、釧路国厚岸三郡漁場及外地各郡島々空地ノ内、入念検査致シ自費ヲ以テ諸漁物昆布等精々開業仕候。

一 勇払郡海底ノ儀ハ従前砂泥ノ地ニテ根磯一円無之且ツ近キ野山ニハ巖石地理遠クノ土地ナレハ、先祖共ヨリ私代迄惣土人へ食料ノ作物開墾方精々解キ論シ種物ハ年々ニ分配シテ相営マセ候処、何レモ勉勵シ示今ハ相当ノ取入レニ安堵罷在候、且同地方海辺川々沼内トモ従前通相営ミ候外、鰯鮭漁場トモ自費ヲ以テ数ヶ処新開營業仕來候。

一 石狩国川筋通りエベツト前口ヨリ下手の方、水門口迄ノ間及同郡海辺トモ過ル文化ノ度鮭漁場数多ノヶ所自費ヲ以テ新開致シ、其他隣地厚田、後志国小樽、高島各郡へ鮭漁場前同断新開、且ツ従前用井來候指網ノ外右漁場へ建網、笈ル網始メテ取開キ繼業仕來り候ニ付、其已來隣郡忍路ヨリ以南同国寿都迄右網ニ品追々広ク取開ケ、鮭漁業方盛大ニ相用井罷在候。

一 砂流郡東西従前漁場ノ儀ハ其ヶ処ヶ処ノ海底、根磯甚タ少ク右ニ準シ昆布ノ出產ニ付、先般御開拓ノ厚キ御趣意ニ基キ、右昆布磯新開ノ儀念願ニ掛ケ愚昧ナカラ奮發致シ、同郡海辺近キ野山ノ内処々ヨリ岩石見出シ、過ル万延元年先以対百程ノ石ヲ手輕ニ切割リ、ソレニ棕櫚ノ細繩ヲ掛ケ、深淺ニ広シ沈メ、浮木ヲ添ヘテ数ヶ所ニ入置キ、凡ソ六ヶ月相過キ飯ニ引揚ケ検査スルニ、追々潮垢相染ニ從ヒ昆布根ヲ宿シアルニ付、其儘入置キ十二ヶ月ヲ経再度同断検査仕候処、追々生育正ニ繁茂実入ノ勢相備ハリ候間、同二酉年ヨリ磯新開方勉勵致更ニ出產ニ相成候上ニテモ永年御上向御取中納、左ニ御国地一般潤色随而右開墾ノ私後年迄營業ニ茂相成可申愚考決定ノ上、短才ノ心魂ヲ尽シ、自費ヲ厭ハズ数多ノ人夫ヲ以テ三人持四人持位ニ岩石ヲ切割、従前漁業場ニ可相成海底測量ノ上幅長町間等ハ其場ニ広シ、漸々取沈メ、

昆布磯新開ヲ遂ケ出籥取立ニ相成り候手配リ方左ノ通り

一、同郡従前驛通ヨリ西浦ノ方ハウエンチャブヨリシノダエ、モノダエ、ビラウトル、フエバブ迄ノ間、右五ヶ所取続ケ沖手の方へ手近沢口野内ヨリ岩石切出シ、自費ヲ厭ハズ精々尽力昆布磯新開ヲ遂ケ候

一 同郡東浦ノ方ハノツト岬東付ヨリウエンナエ。ヨウチウ川口近迄及カバリ、フグモミ・アツベツ川ヨリ西付海岸砂岬迄右五ヶ所取続ケ沖手ノ方へ前同断・

一 其他同郡海庭従前漁場ノ外先祖共ヨリ私代迄鰯鮭漁場自費ヲ以テ新開致シ、且惣土人共へ食料ノ作物開墾方前勇払同所為相営來り候

○釧路国厚岸郡従前驛通ヨリ西南東浦沖手ノ方へ昆布磯新開致候ヶ処左ニ、西浦モンシユチヨリ西付トマタル浜迄ノ間海底へ取続ケ、過ル万延元年ヨリ自費ヲ以テ昆布磯精々新開致シ砂流郡同様新昆布連年生育繁茂更ニ出產相成來候。

一 南浦アエカブ岬右及沖手の方トモ前同断・
一 同アエユンガブ岬前同断・
一 同セリカラダ海内ヨリ沖手東ノ方地名マビル近キ海辺迄取続同断。

一 ポンモンシリ海辺西北東沖手ノ方へ前同断
一 同シチルプ 前同断

一 同モチルプ 前同断
一 同ワタラチルプヨリ東ノ方ヒバセ川口近キ海辺迄取続ヶ前同断

一 同ケニボケ島西北及巽ノ方出岬内付海底迄前断
一 同キエダツプ島南浦出岬内付キノ方へ東浦トウブツ海底沖手ノ方へ前同断。

一 同ウエンシリ岬沖手ノ方前同断・
一 同シリシツ浜ヨリ東付キアチャロブ近キ海辺迄ノ間取続ケ、引網

一 統丈ケノ海底取除キ昆布磯新開前同断。
一 同アチャロフヨリ東付ポロト西付岬迄海底ノ間前同断

断

- 一 同ムニカルウシナイヨリ東付キボンポルト迄海辺ノ間前同断。
- 一 同ボンポルト東付岬ヨリウラエンコタン近キ海辺迄ノ間前同断
- 一 同ウラエンコタンヨリ東付キモエラアトエ近キ海辺迄ノ間前同断。

- 一 同モエラアトエヨリ東付エチヤシト近キ海辺迄ノ間前同断。

- 一 同エチヤシト浦ヨリ東付キ海辺岬左右沖手ノ方トモ前同断。

- 一 同ヲツチシ岬西付海辺ノ間前同断。

- 一 同セムセウシ浜西東付岬海辺ノ内前同断。

- 一 同コンブムエ浜西東付岬海辺ノ内前同断

- 一 同チヨボシ浜ヨリ東付海辺根室郡境界迄ノ間前同断

- 一 同郡東西浦従前漁場ノ儀ハ数十年ヲ経候ニ随ヒ海内変化モ有之、後年ニ至リ漁業不弁ノ分ハ先々代ヨリ私代迄ニ讀シ、同郡東西浦々ノ内追々検査ノ上、第一浜中ヲ始メ其他川海沼間トモ数多ノケ処、自費ヲ以テ取開キ四季蜜漁小鯧、鰯、昆布、鮭等豊凶モ有之候得共継業仕候。

但シ同郡ノ儀ハ従前何レモ海辺手近ニ岩石相備ハリ居リ候間、自費ヲ不厭前記ノケ処々々沖手ノ方昆布磯新開ヲ遂ケ更ニ出産ニ相成候。

- 一 根室国同所内地名ベトカ川・フウレン川・同沼・右三ヶ所ノ儀ハ旧来厚岸郡惣土人共由緒因縁モ有之論所ニテ、根室国惣土人共鱒鮭漁漁場ニ相成リ候ニ付、私儀先般御開拓ノ厚キ御趣旨ニ基キ、同郡漁場持ハ厚ク談話ニ及ヒ、厚岸郡惣土人共へ種々申シ諭シ、双方和熟ニ相成、其己来右川沼トモ鱒鮭漁過ル安政三辰年ヨリ自費ヲ以テ新開營業致シ来リ候。

- 一 根室国従前驛通ヨリ東浦ノ内フンコトウフト及東浦ノ内アシリコタン此二ヶ処、前御趣意ニ基キ私ヨリ根室漁場持方へ厚ク談話ノ上、漁場二ヶ処安政三辰年ヨリ同郡海辺私出稼場所前全断營業ノ儀ハ全ク

現地ノ初般ニ御座候。

- 一 同東浦ノ地ボンニシヨマルベツ漁場一ヶ所、明治三午年願濟ノ上新開前同断ニ候。
- 一 同西海岸トモシリウシニ於テ昆布場小船二十艘浜願濟ノ上明治三午年新開營業致候。

- 一 同郡附属志古丹寫ノ内、海辺南北向空地へ慶応卯年願濟ノ上漁場及昆布浜数ヶ所前同断新開營業仕候。

- 一 前同タラグ島海辺漁場及昆布浜数ヶ処、慶応三年願濟ノ上新開營業仕候。

樺太州東西浦奥地ノ内新開ヶ処左ニ

- 一 安政五午年ヨリ東浦奥地ノ内サカエ浜漁会所驛通兼其他蔵々漁納家トモ茅屋根、板、木皮、茅作、或ハ外廻リ四方トモ小丸太圍ヒ等ニテ凡ソ十二棟程取建テ、春鯧、夏小鯧、雜魚類、昆布、鱒、鮭漁場自費ヲ以テ新開營業致来候。

- 一 同ミトマリ 右同様小家三棟。

- 一 同フンベトマリ 右同様小家四棟。

- 一 同ボンナエブ 右同様小家五棟。

- 一 同サツサツ 同 右同様、小家六棟。

- 一 同漁会所ヨリ東付ポロシユマヤ 全小家五棟。

- 一、同シユマヤ 全小家六棟。

- 一、同浜中浜小屋 全小家三棟。

- 一、同ナエブツ川鱒鮭漁、番家蔵七棟。

- 一、同ナエブツ沼 全 小家四棟。

- 一、同ナエブツ浜 全 全小家五棟。

- 一、同アエ浜川兼 全 全五棟。

- 一、同ヲシユンロケナイ 全四棟。

但シ過ル安政五午年ヨリ同六未年前記ノケ処々々自費ヲ不厭精

勸新開ヲ遂ケ候ニ付、速ニ仕送り米始メ諸物品等々手船数艘雇船等へ積入差トシ来リ、且右新開ノ場所々々ヨリ漁業豊凶ニ拘ハラズ、年々取揚候諸物産積取、往復ノ砌現地或ハ連中ニ於テ数度大時化ノ為メ、時ニ数多破船ニ及候得共、右海難ヲ不厭心魂ヲ碎キ慶応ノ度迄精々力ヲ尽シ営業致来候。

御掛様

平民

山田文右衛門

(許可番号 〇四・〇九五)

同州西浦奥地新開ノケ所左ニ

一 ウシヨロ郡ノ儀ハ明治三年迄御直営ノ処、同四年ヨリ私へ御委任ニ相成候ニ付右漁場自費ヲ以テ引継ギ営業致来候。
一、同郡南付岬ノ内海辺辺へ鯨・鱒・鮭漁場自費ヲ以テ新開営業致来候。

- 一 同南浦ノ内、 前同断、
 - 一 北海辺ノ内、 前同断、
 - 一 手先ノ海辺 前同断。
- 以上

但シ樺太州西浦ノ内自費ヲ以テ新開営業ケ処々々ニ候得共御上向ニ於テ無御予義御上地被仰付、無是非返納奉申上候。其後堀大判官殿ヨリ前期東西浦方自費ヲ以テ新開ノケ処、初年ヨリ御上地迄開業ノ年数一ケ年毎損益明細代価付ケノ仕払調帳、私及松川弁之助、佐藤広右衛門一同へ急無相違調置候様、御発達有之候ニ付何レモ明細取調帳冊全備用意致置キ、前大判官殿同州ヨリ東京へ御出府ノ砌、銘々ヨリ差出シ則チ御持参ニ相成リ候。

右ハ今般当全島東西各国郡及附属島々ノ内、先々代ヨリ私代迄自費ヲ以テ漁場昆布場新開ノケ処々々御質問ニ付、前記ノ通り大略奉入御覧候也。

明治十四年第八月十三日

開拓使

函館区弁天町二丁目 籍

「山田文右衛門履歴」解説

工藤 義衛

山田文右衛門家は、村山家と並ぶ場所請負人の代表格で、代々文右衛門を名乗った。特に文右衛門清富（一八一七～一八八三）は、昆布養殖に功績があったことで知られる。また清富は幕末から明治初期にかけて石狩で鮭漁場を経営しており、石狩市親船墓地には墓所があるなど石狩と関わりの深い人物である。

本資料「山田文右衛門履歴」は『北海道史』編纂の際に道庁の道史編纂掛からの照会に応じて大正八年に山田實丸氏がまとめた資料で、北海道大学附属図書館北方資料室が所蔵している。（道写本四三九）内容は家系のほか手船や山田家が携わった勇払、石狩、小樽などの漁場の状況についての記述がある。

山田家の系譜については本資料のほか、亀畑（亀畑一九七九）やフラシエム（フラシエム 一九九〇）らにより検討が加えられている。しかし、本資料は現在も山田文右衛門家及び北海道史の基礎資料であることは変わっていない。

石狩関係では、石狩鮭引場と経営者の一覧がある。内容は明治三年の『石狩郡諸調 庚午年』（道文・簿書一九六）の「石狩秋味鮭引揚ヶ処並歩役取立方調」とほぼ同じである。同時期の石狩の鮭漁場経営者に関する資料としては『石狩郡図（三番）』（北大付属図書館・図類二三）がある。これらの資料を比較検討することによって石狩における明治初期の鮭漁場経営の動向を知ることができるであろう。

活字化にあたっては北海道大学付属図書館に収蔵されているカーボンと毛筆で複写された資料を底本とし、生振在住の北海道史研究家故長谷川嗣氏による読み下し手稿を参考にした。

長谷川氏の手稿は、平成十八年に同氏のご子息である長谷川心平氏から石狩市民図書館に寄贈された資料に含まれていたものである。長

谷川嗣氏の地道な研究をこのような形で活用させていただけたことにより、まさに学問は世代を超えた営為であるということを実感することとなった。改めて長谷川嗣氏及び諸先達に感謝申上げたい。

（工藤義衛）

参考資料

亀畑義彦 一九七九 「我が祖・山田文右衛門履歴 上」『北海道教育大学紀要第一部B 社会科学編 29巻2号』
亀畑義彦 一九七九 「我が祖・山田文右衛門履歴 下」『北海道教育大学紀要第一部B 社会科学編 30巻1号』
フラシエム・ロバート・G 一九九〇 『蝦夷地場所請負人』 北海道出版企画センター

工藤義衛 「石狩郡図三番について」 いしかり砂丘の風資料館研究紀要

工藤義衛・坂本恵衣 「石狩郡諸調」 いしかり暦

昭和六年三月 発行
昭和二十四年十一月 再刊

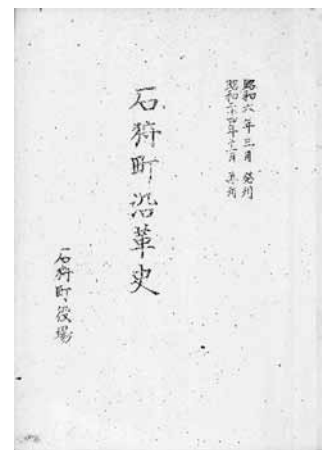
石狩町沿革史

本書は昭和六年石狩町青年分団に手により編纂されたるものにして今より二百八十一前に遡る歴史を有し福山、函館に次ぎ本道に於ける最古より拓けたる地として鮭漁業を以てその名を知らしめたる石狩町の榮枯変遷の跡を學ぶに甚だ興あるものなり

古来榮枯盛衰を以て世の習ひなりと謂ふも要は石狩をして昔日の繁榮石狩否それ以上の石狩たらしめんとする策は即ち地理的諸條件に適應する事業の勃興するにあらざれば至難なりとする。然るに今や産業の諸改良すなはち瀟大なる造田工事それに伴う農村道路の改良等は町産業上の絶大なる實力向上となり河口問題亦さきに指定港湾となり沿岸漁業、遠海漁業の根據地及び集荷場として發展の將來に對する数多くの希望を持たせつゝあり

独り町發展のみならず新日本建設の重要な役割りを持つ宝庫北海道のホープとして更に將來一層の進境を望むは萬人の等しく感ずる處なり

さきに本年十月十四代目町長言飯尾田什氏の下に全町舉つて自治制施行開町八十周年記念式典並びに之れが記念行事として盛大に行はれたるも ともすれば吾人の記憶より忘失されんとする先住者の人々



石狩町役場

の深刻なる力と犠牲と精神力とにより築かれたる尊き開拓の事跡を諸人に了解されん事を切望し八十周年記念行事の一端として近く石狩町史の発行されること、聞くも本書全文を當時(昭和六年)の原文のまゝにてこゝに増刊をこころみたるものなり

昭和二十四年十一月

石狩青年團

序

榮枯は常なり興廢は勢なり 旧都必ずしも永久に旺んなく新興の町村鬱然として檣頭するもの比々として存するあるを見ん

然りと雖も物休養ありて始めて活動を完ふし得べく不断の能率は到底完璧を期し難けん 今や 吾石狩町は其休眠期とも謂ふべく之を刺戟覚醒するものあるを待つや久し今次吾町青年分團の編纂に係る沿革史を通覧するに往時の盛衰歴々として紙上に躍動し懦夫をして立たしむるものあり 優志をして泣かしむるもの多く眞に悲喜交々の感や深し即ち本書憲に町民の警鐘たり又光明たるを知る

由来歴史なき國にして未だ嘗て文運の拓けしを聞かず吾町幸にして本書の如き好恰の小國民史あるあり採て以て指針となし挙民奮起するあらば町の治績や期して俟つべし 一言叙して序に代ふ

昭和六年三月

大澤金吾

序

一町一村の發達を企画し 町民の福利増を図らんと欲せば須らく其町の歴史と現在とを知りし今後の推移を洞察し以て自治振興の方策を確立せざるべからず

蓋し地方自治体の振否は一國隆昌の因をなすものなればなり 其土地潤からず其戸口密なると雖も思ひ一度榛荆草創に致し風餐露宿備に辛酸を嘗め經營慘膽を極めたる先住者を追懷せんか轉た今昔の感に堪

えざるなり

顧るに本町は全道中早くより開けし地にして古来より鮭漁業を以て知らる從て昔殷賑を極めたりしが爾來幾星霜時勢の変遷と共に漸次衰頽に傾き現今に至りては僅かに其殘端を保持するにすぎず施政の要は温古知新に在り

茲に其沿革を収録し将来の籌画に資せんとす 若し本誌が涓埃の効を収め我が町の為に一段の進境を拓き以て自治振興に一助たらんとし
て望むや切なり

編者 識



有志以前の北海道

注・・有志↓有史

北海道地図の最も古いものは三百二十五年前慶長十二年から同十四年にかけて作られたポルトガル製のもので現在の地形と大差がないが日本人の手で描いた最初のものでされる元禄十三年（二三三年前）即ち前提の図にして石狩川から苦小牧に引く一線で二つの島に別れて居るのも珍奇である 然るに有志（有史）以前北海道に関する北村理學士の書を読むと有志以前は此の蝦夷地図のやうに二つの島に分れて居たのであると言ふ

中生時代の最后・・・例の恐ろしい大きな爬虫類が漸く影をしやうとした白亜紀の終り頃からそれに次ぐ新生代第三紀のはじめ頃にかけて渺茫たる北海のまった中に南北に延びた細長い島が浮んで居た 然らば一説には亜細亞大陸の壓力で生じたといひ あるいは太平洋底からの牽力で生じたといひ近くはウエーゲナーの大陸漂移説による新解釋があるがこの島こそ今の北海道の全身で現在北海道の脊梁をなす蝦夷火山系即ちそれである この島が現在に近い雄姿を見せたのは第三期も終り頃だが釧路、十勝、石狩等の平野はまだ海中に眠って居た 此の島がその頃大小二つの島に分れて居たことは前図でも判る通り日本海岸の石狩川口から太平洋の苦小牧付近に亘る平野に浜積期の沈積物を見る事實から推して當時日本海と太平洋を連絡する一水道があつて現在の渡島半島は一個の島として本島主部と分離して居た事を想像するに難くないこれが現在の様に一大島に変わったのは極めて近代に属することで石狩川が運んで来た土砂の沈積作用と浜積期の終りでより地殻の隆起によるためであつた

（北文史載）

石狩町沿革史

石狩町の昔時を探索するときは勢い祖先の事実を記載するを以て適當とす

其祖先は二百四十年前能登國阿部屋に生れ十八才にして松前福山に移住せし村山傳太夫（當代村山コト十二代の祖先）なるものにして后石狩に渡り土人を使役に漁業を為す 其收穫せるものを松前に送りて販賣商業せるを始めとす 次で東西蝦夷地を探検し東は國後、根室、厚岸、釧路、西は樺太、宗谷、斜里、留萌、増毛、浜増毛、厚田、石狩に於て数カ所の場所を開き領主より漁場請負を命ぜられる

宝永三年幕府石狩場所を設け次代村山傳兵衛をして之を請負はしむるや石狩を根拠とし諸方を手配せり此のとき松前藩石狩領を設け分ち家臣の来邑とす皆運上屋の設けあり其頃には石狩は無人の境にして土人より外に使役するものなく唯漁期中福山より少数の出稼人を引率し來り土人と混して漁業從事せしもの、如し

文化四年函館奉行に全十二月幕府東西蝦夷地を挙げて松前藩に返し安政二年再び幕府の直支配となり松前奉行に移す此間村山の請負は依然として變ることなし 全四年幕府勤番所を設け調役以下諸士來り在勤し此の地に直捌場所となし村山の請負を免じ出稼人となし通行人取扱其他用達を命じ運上屋を本陣と稱し石狩十三場所を統括す此頃より明治初年に至る間來住者漸く多く山田文左（右）エ門（原文ママ）なるもの最も手廣く漁業をなせりと傳ふ

明治初年幕府政權を同時に蝦夷全道を北海道と改稱す 二年九月更めて兵部省の支配となし三年正月開拓使に移住四月開拓使出稼所を置かれたり

先是佐渡奥羽等より移住するもの非常に多く今の本町は早く既に市街の体裁を為し開拓使庁の貨物運搬官吏の往復等皆道を此處に取りたるを以て戸口は日に月に繁殖し石狩町の資格を形成するに至れり

明治四年五月花畔村生振村を開村す全四年石狩諸漁場は石狩共有となり六年七月一般人民に漁場拂下あり各民有に属す 七年一月開拓使厚田出張所を石狩出張所に併合十一月浜益出張所を石狩出張所の派出所となし八年二月出張所を廢して本庁民事局派出所を置かる

五月火災あり全市街烏有に歸す 九年二月新たに市街を区画し十町に分ち道巾八間とす 九年四月民事局を廢して石狩分署と稱し全局派出心得を以て事務を處理す

十一年一月分署を廢して札幌本庁の直轄とす 全年七月幌内煤炭の運搬は直接採掘地より石狩川を下すに決し河口開鑿の議起りて測量に着手す十二年五月開拓使庁御雇水利工師和蘭人ヨハンソワコタルトフアンソケント來りて石狩に区留し主として河口其他の測量に従事す

全年七月石狩郡役所を親船町に置き石狩、厚田、浜益、上川、雨龍、空知、樺戸、夕張の八郡を管轄す 全時に石狩河口改良係を置き着々測量設計等を進歩せしが工事主任ファンゲント病に罹り全年十二月死亡し起業方法も亦中止するに至れり十五年十二月開拓使を廢して札幌縣を置かる、や樽川村を新開す十七年七月降て石狩外七郡役所を改めて石狩、厚田、浜益の三郡役所となす全十八年虎列拉病流行し患者六百二十人内死亡者八十二人を出せり全年八幡町字高岡部落開村あり十七年二月札幌縣を廢し北海道庁を置かる十一月郡役所を親船町に移転す（現在庁舎）元は船場町上テイネ河岸に建設あり 旧開拓使時代石狩川河口改良事務所として外国人の住宅なりしを三郡共同にて官より拂下たるなり

二十二年郡役所を廢して札幌郡役所に合し更に戸長役場を置く 二十五年市大火あり烏有に歸す 二十六年に亘り各村落殖民区画割をなし貸付地を許可す 此の年より移住頓に増加し農業大いに進む

三十一年生振村花畔村大水害あり 三十五年四月一日二級町村制を実施せられ親船町外九町及生振村を合して石狩町とし花畔村樽川村を合して花畔村（原文ママ）として漸く自治の基を開き四十年四月更に此

の両町村を合して石狩町となし今時に一級町村制を実施せらる、始めて獨立自治團體を組織するに至れり

按するに石狩町の夙に拓け広く世に知られしは其原因一は鮭の漁場たりしこと 二は石狩河口が船舶の碇繋場たりし等に由れるものにして既に於ける人文の程度にては 浚たる自然の宏河渺々たる天啓の沃野か其拓殖交通上如何なる關係を有するか未だ曾って發見せられざりしなり

町村名由来及旧土人に関する事項

石狩市街及八幡町字高岡

明治五年役人岩田甚兵衛なるもの市街を分ちて十ヶ町とし左の名稱を付す

親船町 本町 横町 弁天町 新町 仲町 浜町 若生町

船場町 八幡町

右名稱はアイヌ語に因て土地状況を鑑み付名したるものにして當時草木鬱蒼として狐狸鹿狼の巢窟たり区画判明せざりしも六年石狩漁場拂下となり民有となりし以来漁業者競争其業を營み従つて商店も殖へ戸口増加し来たりたり 當時開拓出張所は若生町に置かれ十五年庁使置縣となるや戸長役場を親船町に移す 明治十七年石狩外二郡役所を設置したるときは漁業の進歩と共に市中繁盛を極めたりしも 二十二年郡役所を廃せると共に漁業も遂年不振の趨勢を示したり 農業は當時多く保護移民の手にのみ開懇され北海道の遺利を傳せんとする輩は先づ漁業に就めされば商業に走りしなり殊に當時の石狩は四圍二里余りに亘る深林に入るに非されば沙漠地の絶えざるの地勢にして僅かに明治十八年山口縣の保護移民を八幡町字高岡に移住せしも深林柴筐繁茂し土地平坦ならざるを三ヶ年間開懇の

ため非常に困難を嘗めたるも幸にして土地稍々肥沃なりしを以て近く自活の道を立つるに至り 此の保護移民を初めとし遂年開拓の域に進み現今に至りては九十戸を有す

花畔村

明治四年五月村名を附す此年岩手縣宮城地方の保護移民三十九戸を移し毎戸に土地二町

歩を附与し一反歩二町の開懇料を補助し家屋（間口三間 奥行六間半）を與へ三ヶ年味噌を（男六合 女三合）給與し農具種子一切を貸付し以て農業を奨励し然れども土地砂漠にして収獲少く多くは本道農耕に不經驗なるに不拘らず離散の念なく能く寒苦を忍び以て開懇に従事せり其後二十年頃までに移民の増加したるもの少し降つて二十六七年に至り移民増殖の趣旨に依り殖民區画を実施せられ次て（一戸一万五千坪）土地の無償貸付を許可せるより移民頓に増加し二十八年石川縣より三十二戸の團體移民を初めとし遂年農家戸数増加し三十五年四月二級町村制を実施せられ石狩町花川村組合制度を更めて四十年四月石狩町とし花畔 樽川 生振の三村を大字とし一級町村制を布かる

生振村

明治四年五月宮城縣高木 松島 磯崎 米澤地方より三十一戸移住せるを初とし今の旧村と稱するものなり當初は石狩河沿岸に住居し家屋及米噌は官より給與せらる開拓使保護亦厚く皆農業に従事せり經營寒苦を忍びたること花畔と同様なりき 爾後十五年迄に茨戸よりビトエに至る沿岸に僅かに十戸の増加を見たるのみ十八年山口縣より移民あり内六戸を残して更に高岡に移る今の通稱六戸と唱ふる處是れなり

其の後漸次農民移住するもの多く降つて二十七年殖民區画割一戸

一万五千坪となり九月より翌二十八年四月迄の間に於て全村の大部分の土地は概ね貸付を受け先づ愛知縣團體四十戸を第一に遂年移住者多く四百戸に上りしも三十一年全道未曾有の大水害に遭遇し其後に転貸し戸口稍々減少せり

樽川村

管内村落に於て最も早く開けたるは樽川村にして往昔オタル内と稱す

文化年間石狩村山家に於て一の漁場を開始せしより海浜二三ヶ所の漁場を開發せられしも陸地は一の開拓を見ざりし明治五年本名を付し十八年山口縣移民九戸移住し貧窮者には小屋材料及種子料として金貳拾円を貸與し専ら農業を奨勵せらるゝも地味濕瘠地にして農業のみを以て生計を立つるに足らず故に傍々副業として夏季は「シゲ」刈 重に鯨漁に於て早燥するに用ゆる藁の代用青草冬季は薪材を伐りて小樽に搬出し漸く生計を立つるにすぎず

一戸僅かに五千坪の割渡も数年経るに非らざれば成墾する能はざるの状態なりき降て 二十六年殖民區画割をなし一般人民に貸下したる以来農民大いに増殖し 三十五年四月花畔村と合し花川村とし二級町村制を施行され後一級町村制を施かる現今畜産最も盛んにして本道有数の畜牛地なり



旧土人來歴

明治十七年対雁村樺太移住旧土人部落の一部を分ちて現在の大字八幡町字來札に移住せるを以て當地土人部落の主なるものとす

此地古来より秋季に至れば鮭漁夫として上川近文のコタン（土人の常住地）より入家するもの多く 貞享四年の春（二四三年前）水戸藩の家臣快風丸に乘じ常陸の那珂港を發し六月松前に至り元禄年間（元年）再び松前に入津六月石狩に到着し通辭をして蝦夷に告げて來觀せしめたが敢て來る者が無い 更に酒を用意して招いた處三日間に男女千余人來たりたりと留ること四十余日にして米一斗二升を以て鮭百尾と交易し塩鮭一万尾其他干鮭や熊の皮等を積載して八月出帆したが颶風に遇ひ指揮官従目付立花源太兵衛以下二十八名を失ひ辛ふじて那珂港に歸る此れ水戸家が北地經編史の發端に於て拂つた第一の犠牲であつた

水戸公斉昭の北地開拓の建白は実に壯烈至極なるものであつた

快風丸

（長二七間 幅九間 艀四十挺 帆柱十八間 五百反帆 の大船南部に於て建造す） 「北方文明史に據る」

今八幡町來札旧土人の來歴を索るるに明治八年日本領たる樺太を露國に交換せらるゝや 明治八年西族約八百人樺太より宗谷に渡來し鮭漁に従事翌年小樽に至り一ヶ月逗留此間一切の経費は開拓使に於て給与支弁せり 七月札幌郡對雁に全部移住せしめ草小屋を建て約二百戸一部落とし全時に石狩に三ヶ所に鮭漁場厚田に秋季三ヶ所鯨漁場を付与せらる而して壯者は春季厚田に秋季は石狩に出稼ぎて漁業に従事し且つ對雁には製網所を設け婦女子をして製網に従事せしむ 斯して明治十五年迄は開拓使の保護の下に經營し來りしも十六年に至りて其□絆（注一）を脱し独立自營の民たらんと欲し共給組合なるものを組織し當時開拓使の官吏たる上野正を挙げて組合總理となせり 十七年對雁部落の大半（百二十戸）現在の八幡町字來札に移住し専ら鮭鱒漁業に従事し自活の道稍々樹立せんとするに際し悪疫流行し十八年より二十年に亘り虎列拉及赤痢等蔓延し此等の疫病患者多数顯著せり豫防救法の法至らざるにあらざれども卑意醫術の進歩今日の此にあらざる

に基因せずにはあらず措らくは罹病者死亡約四百人を算せりと

實に悲惨同情に堪えず夫れより遂行漁業の不振と共に漸く生計の困難を感じ追々他地方に向つて流離し或は故郷樺太に巡歸するもの等ありて戸口著しく減少せり

明治三十六年に至り漁業の収支償はず連年の不振の結果負債を嵩み到底維持する能はず為に石狩漁場一ヶ所及び厚田漁場を売却し僅かに負債を完済するに至り全時に組合を解散せり 三十二年に至り本道旧土人保護法の發布せられたる結果旧土人財は道庁長官の管理する處となれり

當時石狩は二ヶ所の漁場を余すのみにして此の場所も軌近に至り連年の漁獲不漁に陥り従来漁業を以て主に生計を營み來りしも一朝期の如き境遇に際し到底自活の途立たざるを以て戸口益々減少 三十七年に至り對雁村に二戸來札に三十五戸を止むるにすぎざりき全年十月來札に旧土人學校を設け土人子弟を教授せり 當時住民生活の状況益々困難に陥りたるを以て小壯者は漁夫となり妻女は日雇をなし僅かに口糊を凌ぎ來りしが計らざりき三十七八年戦役の結果樺太島我版図に歸するや多望なる而も懷郷の念に馳られて彼地に渡島するもの陸續と相踵き三十九年十月までには來札部落の全部を擧げて樺太に移住し終れる 共済組合理約の主なるものを摘記する左の如し

漁業の利益あるときは十分の二を役員の償与とし其殘額にて鰥寡孤獨(注2)の救護に及就學費業料救助費 事務所費に支払殘額あるときは更に二分し一を非常共有準備金とし一を組合員一般に配布するものとす

組合役員 二十一年調

總理一名 幹事支配人伍長船頭各一人 下船頭十數人 計二十五名

地理

位置

石狩國石狩郡の西端に位し北緯四十三度十六分東經百四十一度二十二分 北は厚田郡厚田村聚富に界し東は當別村に南は札幌郡篠路村琴似村大字篠路兵村に接し西南は錢函村手稲村に接し西は一帯日本海に面して右に厚田 浜益の遠山を眺め左に錢函小樽の諸山を望み遙かに積丹半島と相對す

地勢

東西に短く南北に長く字高岡部落の一部を除き地勢の一帯平野にして石狩川は町の中央を還流して海に流れ 川の西方に石狩市街及花畔樽川の植民地を擁し東方には市街の一部生振村及高岡の植民地を以て當別村に連る

河流

石狩川 其源を遠く石狩嶽に發し蜿蜒屈曲茲に至りて日本海に注ぐ延長百六十七里水深四十及至五十尺海潮數里に溯り水流浚かにして小船の來住に便なるも河水浅く干潮七尺満潮十尺にすぎざり六十噸以上の船舶出入するを得ず 河中平均百間

聚富川 厚田郡と石狩郡界に在り川中十間延長五里日本海に注ぐ美登位川 生振村當別村界にして延長一里川中五間生振村ビトエに至り石狩に注ぐ

茨戸川(一名天然川) 上流發寒川と稱す花畔村樽川村と篠路村琴似村との村界を流し川中八間花畔村字茨戸太に至り石狩川に注ぐ

小樽内川

地質 樽川村より弁天町八幡町シツプ村に至る沿岸を總稱し海岸より約一里に亘る陸地は一帶砂地にして其奥地に所々泥炭あり地味概して肥沃ならず海底は陸地全様砂浜なるも岸より約十町を出づれば泥盤なりとす

氣候 乾にして湿度は盛夏は八十五度以上に昇ることあり
 極寒零下五度を示すことあり梅雨の候と雖も陰暈の日少く濃霧の襲
 ふ事稀なり 只特殊とすることは年中の三分の二は概ね強風の一事
 にして毎年十一月より翌年三月までは西北風強く四月より六月頃ま
 では南風七月より十月頃までは東風稍や強く西風は稀なり

廣袤 面積三千九百六十一万五千九百四十四坪にして内三千万坪は民有地
 三百七十八万坪 残餘は未開地海浜地等とす



維新前の経歴詳ならず 所謂有無にして化せるならん

明治四年若生町に開拓出張所を置き管轄す 八年之を廢し本庁民事
 局の直轄となす 明治九年九月全道大小区画を定むるや石狩郡を第二
 区とし更に親船町、本町、横町、弁天町、新町、仲町、浜町、船場町、
 花畔村を第一小区とし若生町、八幡町、生振村を第二小区年区長を置
 き区務所と稱す

全時に区の下に戸長、副戸長等を置き町村の行政事務に當らしむ 鈴
 木徳右左なるもの初代の戸長たり十五年樽川村を設置す 茲に於て親
 船町外九町三村戸長役場制度なり

十町三村を管轄す各町に總代人組長の設あり十七年石狩郡外二郡役所
 を親船町に轉せらる、や戸長役場は一時廢せられて石狩郡各町村の行
 政を郡役所直轄となす當時郡長心得書記齋藤皓氏其任に在り且つ札幌
 警察署石狩分署警部を兼ね當時庁舎の二階にて郡役所下方にて警察部
 事務を執る二十二年郡役所を廢して札幌郡役所に併合するや再び親船
 町外九町三村戸長は引續き齋藤皓氏にして且つ警部を兼ね石狩分署長
 たり

二十八年戸長死亡し加藤一魯氏繼いで戸長たり 當時石狩市街に七人
 高岡、生振、花畔、樽川、各一人の總代人を設り行政に參與す
 三十五年四月一日二級町村制實施せらる、や石狩市街及生振村を合し
 て石狩町とし花畔村と樽川村を合して花川村となし各町村共同事務處
 弁するため石狩町、花川村組合役場を設け加藤一魯引續き組合長に任
 命せられ石狩町に十二人花川村に八人の町會議員の選出あり 代議機
 関となし部落には数名の部長ありて組合長の命を受け町村事務を補助
 し三十六年二月下田實代つて組合長たり

三十九年五月山崎龜藏全十一月中川寅三の諸氏更代す更迭頻々たり
 四十年四月一日石狩町 花川村を合して石狩町とし一級町村制を施行
 せらる、や北海道庁属村松 晃事務取扱者たり全年六月一日十六名の
 町會議員の選挙あり二十六日鈴木寅吉氏町長に就任せり

戸口の増減沿革を探究するに維新前に評さにするを得す 只石狩河岸
 に十数戸の土人棲息し 又村山家漁場請負時代に於て数十戸の土着倭
 人ありしと云ふ

安政の巳年より明治四年まで近々移住民増加し来るも皆漁業に従事す
 るもの又は二三の商人のみにして農業を以て生活を立つるもの絶無な
 りしが如し

今 維新後の戸口を示せば左の如し

明治五年	石狩市街	二一三戸	人口	六二七人
生振		二九		一八八人
花畔		三五		一二六人
明治十五年 (開拓使の終り)	石狩市街	二三五戸		八二〇
	花畔	五〇		一六〇
	生振	四八		一五五

官公署 學校 病院 並 諸團體 沿革

石狩町役場 明治四年若生町に開拓使出張所を置き管割す 八年之を廢し民事局直割とす十二年七月石狩郡役所を親船町におき(石狩、厚田、浜益、上川、雨龍、空知、樺戸、夕張)の八郡を管轄す 全七月前役所を廢して石狩、厚田、浜益の三郡役所とす



全年親船町外九町三村戸長役場となす 十七年石狩外二郡役所を現在の個所に移すや戸長役場は一時廢せられ郡役所直轄となす 二十二年郡役所を札幌郡役所に併合するや再び親船町外九町三村戸長役場を置く 三十五年四月一日石狩町花川村組合役場とす 四十年四月一日石狩町役場とし一級町村制を施かる 四十五年改築し今日に至る 庁舎は元船場町字ヤウスバ上テエ子河岸に在り旧開拓使時代石狩河口改良事務所として外國人の經營なりしを三郡共同にて拂下たるなり

石狩警察署 親船町南二十三番地に在り明治十六年の設置なり

石狩厚田浜益を管轄す 駐在所は石狩三 厚田 部長派出所一 駐在所二 浜益 部長派出所一 駐在所三

石狩郵便局 明治八年一月一日親船町北一番地に開設す 二十一年為替貯金を取扱ひ十二月より電信架設 三十二年七月親船町北二十番地に移轉し三十九年十月より電話所を開始せり其配達区域は市街生振村の北線八幡町高岡、聚富村、望來村なりしが后望來村分離せり(昭和二年) 切手売捌所を八ヶ所に設く

花畔郵便局 花畔市街地に在り三十七年三月開設 切手賣下所は二ヶ所にして配達区域は花畔 樽川 生振 南線全部とす

八幡郵便局 大正九年創立 無集配局なり

札幌区裁判所石狩出張所 明治三十二年六月親船町北二十二番地に設置す 以前は親船町登記所と稱す 一時役場に併置し在りたり后現在の個所に移る

石狩燈台 明治二十四年十二月建設 石狩河口に在り 二十五年一月一日より点火す 木造六角形にして黒色横線に塗り基礎より灯火まで高さ四丈なり 灯火は眞方位南四十三度十分西より北四十三度十分分迄百八十度間を照輝す 明治四十年九月七日改築 全四十一年一月一日竣成す 鉄造円形白色とす 六年灯台にして閃光を發す燭光數三千にして晴天の夜十二湮まで光達す 昭和二年六月一日電灯布設工事落成し全日より灯質閃光を左記の通り変更す

- 一、三百ワット電球 燭光六万五千
- 一、第六等閃光白色 毎二十秒に在り

吉高罐詰工場 船場町一番地に在り

大正十五年五月事業開始し主として鮭、荷の缶詰に従事す 原動機としては石油發動機二馬力一台 電動機一馬力一台なり 經營者高澤喜代治氏

石狩小学校

横町北二十二番地に在り 恰も石狩町における教育の実施は明治五

年の頃にして所謂寺子屋式の教授をなしたるに創まる 當時皆篤志家の私立に係り課程は習字 讀書にすぎず之が師範の任に當りたるは眞宗能量寺住職曾我某醫師高橋某其他一、二あり算術は夜間に篤志家の門に入り指南を受く其后明治六年に至り公立石狩教育所を開始せられ同時に前記の生徒皆収容し尔来生徒の増加に伴い小學校制度の秩序更りたるにより明治八年二月石狩學校と稱し當時民家を借入れ校舎に充つて全十一年三月宅地建物を買入れ附屬とす全十九年若生町に底家を充用して若生分校を設け二十五年一月尋常科高等科を併置す 此月三十一坪半の運動場を併置す全年五月七日御眞影を奉載す 尔来高等科修業年限の変更あり三十年十月新たに二教室を増築し十一月石狩水産補習學校を併置す 三十一年十二月より生徒の貯金を實行す 三十二年一月樽川村簡易教育所を設置す 本校より出張教授す 全年十一月八幡町高岡に分校を設置す 三十三年四月高等科修業年限を四ヶ年全年七月更に変更 三十六年九月工費三千八百円〔五百五十円國庫補助三千二百五十円寄附〕を以て改築八教室総建坪三百三十坪となり十二月五日落成式を挙ぐ 三十八年四月名譽旗を下付せらる 五月石狩商業補修學校を併置す 后幾程もなくして廃す

若生尋常小學校 若生町番外地に在り明治十九年民家を借入れ校舎に充用石狩小學校分校たり全二十二年新築す 三十六年四月より独立す 三十七年一月運動場増築せり 三十八年四月名譽旗の下付あり

高岡小學校 高岡番外地に在り三十二年十一月新築 石狩校の分校たり

生振尋常學學校 生振七線北六号に在り 二十九年十二月全村五線に新築す 三十六年八月現在の個所に移轉す

美登位分教場 生振十一線北九号に在り 三十三年六月新築 當時生振校の分校たり 三十七年四月独立 后分教場となり今日に至る

発泉分教場 生振村八線北四番地に在り 三十五年創立生振校の分校たり

参泉小學校 三線南六番地に在り 三十六年二月新築す 生振校の分校たりしが三十七年四月より獨立し三十八年増築す

花川尋常高等小學校 花畔村十一線二番地に在り 六年四月創立始め教育所と稱す三十六年六月高等科併置さる

志美小學校 花畔村三線番外地に在り 明治三十三年四月創立 花川校の分校たり昭和二年獨立す

樽川小學校 樽川村に在り 三十二年一月始め全村三線に於て民屋を借受け簡易教育所を設け石狩校より出張教授す 三十三年十一月全線二十五号に新築す 三十七年二月失火全部焼失校長森田厚道焼死す 全年八月新築今日に至る

南線分教場 樽川東七三号に在り 三十五年十月西六線二番地小校舎を新築 三十八年東七線現在の位置に移す

町立石狩病院 明治二年九月創始計画あり明治三年三月開拓使の命を捧じ四等医小黒某函館より赴任 若生町官舎に於て医術開業 明治五年弁天町旧本陣なる官邸に移り全邸を医院に充用初めて石狩病院と名命す六年五月小黒氏辞任宮崎氏更代院長となる 七年一月石狩出張病院と改稱す 八年二月出張病院の名稱を廢し官立札幌病院の

直轄となし石狩病院派出所と稱す 九年五月石狩市街大火あり全部烏有に歸す 横町金龍庵の一室を借受院舎に充用院務を執る 十三年八月弁天町に洋式の院舎を新築官營とす 十五年二月開拓使を廢し札幌縣を置かる、や開拓使より院舎器具機械全部を金貳百五十円にて石狩町に拂下を受け町立組織となしたり 全時に參百貳拾円の補助金を下付せらる右補助金にて更に器具薬品を買入れ弘く院務の拡張を図りも為逐年盛大となる時に宮崎氏院長を辭し馬場氏次で其職を襲ふ二十五年五月大火あり入院室を除き焼失す 七月親船町なる學校附属建物を一時充用仮病舎となし院務を執る 馬場氏辭任し松本、中山、森、守谷、山本、佐々木、桐野、加藤氏代つて院長たり三十六年十一月生振村に病院出張所を設置し 二十八年弁天町旧敷地微所(注3)の建物を改築し八月移轉す 示来治水工事の着工と共に戸口増加新たに病院を新設せり大野賢藏氏院長たり加藤氏に代つて朽木氏 鈴木氏となり現在に及ぶ

石狩水産組合 事務所は船場町に在り 明治十九年以前は漁民會社と稱す漁業家團結して水産改良進歩を図る 全年漁業組合と改稱し組織を変更し益々業務を擴張す 三十五年法令の改新と共に更に水産組合と稱す

畠山清太郎氏組長に藤田和兵氏副組長に當選益々組合事業の革新と漁業の隆盛を企図せり 后漁業組合と改稱す 現組合長林喜左吉氏なり

八幡町医院 昭和五年 月開設す 従来石狩川有るが為に不便尠からざるものあり附近住民舉金して設立す 青影金吾氏院長たり

石狩造資組合 明治三十六年十二月創立 事務所を横町に置く 石狩地方の金融着々堅實にし本町には銀行の設立なきを以て是れが地方

の金融上に至大の便を與へたるは事實にして四十年九月末日現在の積立金二千八百八十七円に達し組合員八十六人を有し藤田利兵衛組合長たり

高橋合資会社 元高橋缶詰所と稱す 船場町に在り 三十六年十月改めて合資組織とし水産物製造を目的とす 當初數十人の職工を役し主に鮭缶詰を製出す一日の製造高千五百個にして相當の利益を見た 后鮭原價及諸材料騰貴し事業の發展を妨げ一時休止し燻製塩藏のみを為し本社製出する所のもの品質精良勸業諸會に出品して褒状を受く

高橋儀兵衛氏社長たり后漁業不振の結果四十五年に至り廢止す

富士精軸所 浜町にあり明治三十八年八月の創立にして八馬力の蒸汽器械を利用し百以上の職工を役し燐寸軸木の製造に従事す 當時創業日淺くして未だ充分なる成績を見る能はず一日五万束(一束は徑四寸程のもの一束の原價五錢内外價格約二千五百円を製出し軸木材料需用の關係上時に或は蹉跌を來すの傾向なきに非ざるも設立者の勤勉忍耐能く諸種の艱苦を排して業務を維持したいと當時河口敬若氏社長たり 明治四十三年事業不振のため廢止の止なきに至れり

石狩消防組 明治十九年の創立にして當時星野辰之助組長たり元來石狩市街は火早き地にして維新以來数回の大火災あり住民の安寧上一日も忽せにするべからざるを以て爾來當局者の銳意擴張に努め組頭阿部權四郎時代に於て最も設備刷新改良し三十六年火見槽を建て警備上周到を期せり

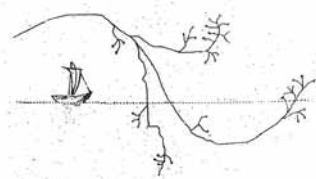
現今組頭林喜佐吉氏にして消防夫數六十三人にして器械器具を完備し着々發展を期し居れり

石狩町農會 明治三十三年の創設にして當時親船町外九町三村農會たりしが三十五年二級町村制實施の結果分離して石狩町及花畔農會となり四十年四月一級町村制實施せられ全時に両農會うい合して石狩町農會と稱し橋本賢弘氏會長たり 尔来銳意刷新今日在るを見たり 現農會長高野金作氏なり 大澤金吾氏技手として在り専心指導に擔り益々向上を計りつゝあり

日本石油株式會社八之澤鑛業所 石油杭の發掘は明治三十六年横浜イントルナショナルライルユムパニーの手に創まる 當初巨額の資金を投じて五の澤より望來村に亘る廣大の区域に宏壯なる設備をなし發掘に着手 數六百當時一晝夜二百石を湧出し品質優良なるも始業三ヶ月余にして漸時湧量減少し僅かに二ヶ所の掘鑿杭數に止め一日平均十石を湧出すにすぎず其后日石の經營する所となり次第に増加し現在にては約二百石を算し我が國油田界中有數の油杭にして現所長は中村卓爾氏なり 日石の經營にならざる以前は宝田石油會社の手に在りたり

名勝旧蹟 附 寺社の沿革

旧蹟と認むるもの村山家の弁天社にして弁天町に在り 明治七年以前迄は現今八幡神社の境内に在り按ずるに元禄七年松前藩の家臣山下半左工門此地に來りて弁天社の創立を促し時に村山家に於て祝賀の事あり 一祠を建てて弁天社と稱す 尔來毎年漁業豊饒なりしと 文化十二年に至り社の鳥居新設の舉あり 材料は御影石全家の手船千石積を以て大坂より運搬し來り直ちに建築に着手數年にして成る構造堅牢石質優良なる附近稀に見る所



明治七年九月全村現今の位置に移轉するに當り護鳥居は其儘存置せり

燈台 〓石狩河口に在り

石油杭 〓東方三里半八の沢に在り

缶詰工場 〓船場町に在り鮭鱒の缶詰をなす

海水浴場 〓沿岸一帯は靜淨なる砂地にして遠淺なるため海水浴に適す 尚三里に亘る 砂丘に咲くハマナス花香馥郁たる鎖

夏に相應し

神社

郷社八幡神社(祭神 應神天皇 合殿 保食神) 弁天町一番地に在り 安政年間の創立八年郷社と公稱す現今花田知也氏社司たり

生振神社 祭神 天照皇太神 明治三十四年十月創立

花畔神社 祭神 金刀羅太神 全 七月

樽川神社 祭神 天照皇太神 全 二十九年二月

高岡神社 祭神 應神天皇合殿保食神 昭和五年一月

寺院

金龍寺 本尊 釋加如來 安政六年九月の創立 日蓮宗

能量寺 〓 阿弥陀如來 明治十一年創立 眞宗大谷派

法性寺 〓 〓 元有珠郡善光寺の出張所なり

〓 〓 明治一三年九月公稱

曹源寺 〓 釋加如來 浄土宗善光寺末

信教寺 〓 阿弥陀如來 文久二年四月創立 漕洞宗

〓 〓 明治三十四年九月創立

光明寺 〓 〓 眞宗本願寺派

玉泉寺 〓 〓 三十五年四月創立 〓

〓 〓 四十年二月 眞言宗高野

人情 風俗 習慣 法言

人情 昔維新前後は醇厚にして各自親和せるも時勢の変遷に伴ひ内地各縣の移住者陸續来り且つ諸種の營業開けてより人情漸次浮薄となり 團結心に乏しく昔時の美其跡を絶つに至れり
民情概して市街は醇厚ならず且團結心に薄く農村は朴直なり
今日の如く不況に際しては思想に一大動揺を來しつゝある折柄石狩町の如き複雑なる諸種の職業よりなる街は殊更に團結心に乏しきなり

風俗習慣 時勢の進化と共に住古の弊風惡習を脱し敢て特記すべきものなし今旧土人に聞するものを掲ぐれば

一 婚姻 維新前後とも只口約のみにして別に祝宴等を催さず 又親族と相婚することもあり 一夫多妾の風ありて婚姻は女十六才以上男子二十才以上とす

一 住居 維新前は主に漁場附近に草小屋を建て住居せり近年に至りて普通の建家と異なることなし

一 飲食物 往古は所謂水草を遂ふて衣食し草根菓實鳥獸魚肉等を以て常食とし酒は濁酒を用ひ月初月終を以て神祭とし其際清酒を供し部落一同集合し祝宴を開くを例とせりと云ふ男女共飲酒せざるもの尠く煙草は粗たる葉巻を又は刻を用ふ現時は一般と異なることなし

一 衣服 男は獸類の皮 女は「アツシ」等を常服とせり 又 女は鮭の皮を以て製したる衣服を晴着としたることありと言ふ

一 政治 總て酋長之を掌る部下は酋長の命に反したるときは輕罪(注3)は説論 重罪は其者の重宝物を没収せりと云ふ

酋長は代々相續す 若し相續者なきときは酋長の家に

次ぐもの酋長權を行ふ

一 美術 彫刻は木材及木皮を以て日用の家具類「パイプ」小刀の鞘等にして今に至る 尚製作するものあり 多く吾人に賞揚せらる機織は日本古風のもの等し

往古はなし教ふる所は日輪 月輪 海神 火神 地神等

一 宗教 往古はなし教ふる所は日輪 月輪 海神 火神 地神等

なり現今は各宗教に歸衣せり 葬儀は死屍を長箱に入れ埋葬す 別に祭事なし 葬儀終るときは酒宴を開く

方言

古來より鮭を秋味と稱す 塩藏したるものを塩引と稱し薄塩製のもの新巻と稱す 土人は「アイヌ」と謂ひ 女子は「メノコ」男兒を「セカツ」 女兒を「カナチ」 拜禮を「ランカミ」 水は「ワカ」 木幣「エナウ」 山「ノボリ」 人は「シヤモ」 ユウカリは謡曲にして其謡ふ所のもの事實を記す 曾て戯作するものなし 其文章形容の妙古詩の風致あり 其中源判官義経の事を演ずるば最も古調まりとす。

石狩港湾築港計画

石狩港築港の實測は明治十三年開拓使雇 蘭人「ファンゲント」氏に始り十四年より十八年に亘りて再び 米人「メーク」氏をして之が計画に當らしめたり聞知するに當時は主として河口を開鑿し河面を以て船舶の碇繋に充るるの設計にて其後三十年より三十二年に涉り道庁技師 廣井工學士の手に實測したるに依れば運河開鑿し外面より直に石狩に出入するの案を樹て更に三十八年より三十九年に涉りて石狩炭會社の築港計画實測となり今年八月調査完了せり 全設計は河口より約三十町上石狩市街の西南端を横断して中九十尺の運河を開鑿し之を水道として外海と石狩川間に船舶往復の途を開き海面に該運河を中

心として左右に三千五百尺の距離（注5）を取り長さ千四百の突堤二個を海中に築出し〇形のものとなし 其突堤巾茲に石狩川一面は總て船舶の碇泊に充て別に石狩河岸に片棧橋を築きて貨物積載を為すの趣向にて此の着手より竣功までを第一期とし更に運河の両面に各長さ五百巾七百尺の船入澗を突き其周圍に於て貨物積載を為すの工事着手より竣工までを第二期となす

然して運河開鑿の暁は石狩町より錢函及札幌方面に通ず通路を横断せらるゝに依り此市街の上には倫敦市の「テムズ」川に架設するが如き開閉自在の棧橋を架し船舶の通行に際しては橋を左右に開放し平時に在りては之を閉鎖して常に人馬の交通に充つるものにして工事は三ヶ年にして竣工の予定なり

以上記述する處は すなわち三十九年の重大問題として廣く世間に注目され起工竣功の暁は独り石狩のみならず本道の發展上如何なる影響を及ぼすべきかは實に不可測の事たり一日も早く着工を待ち居りしに俄然石炭會社の事業經營彼は斤針の変更に依り

斯の大企画たる築港計画は一朝頓挫を來し中止の悲運に際會し一時世の耳目を聳動せし大問題も忽ちにして消沈するの止むなきに至れり是れ石狩住民が過去の歴史に鑑み將來の参考として且つ忘るべからざる事体なりとす

石狩地震

天保五年正月元日石狩地方強震あり尔后二十二日まで震動し地割れて泥水を噴水し會所二棟 倉庫十棟 家屋二十三棟全く破壊し損害尠なからざりき

石狩川洪水

弘化二年石狩川汎濫し堤防破壊せり石狩場所請負人村山傳次郎越後より治水に長したる者十名を雇ひ之に従來の雇人等を加へて新築し尔

后安政四年に至る十余年間年々多少の修築をましたりと言ふ

罐詰（我國に於ける缶詰の嚆矢とす）

明治八年 米國で開催された萬國博覽會に派遣された關係事務官はコロンビヤ州に於ける鮭缶詰業の盛大なるを見歸朝後斯業開發の急を大久保内務卿に建言せしところ直ちに容れられ手動機械一式をニューヨークに於て米貨三百三十弗で購入した この報を耳にした時の開拓使長官黒田清隆は横から手を出しまんまと本道へ轉送させてしまった 石狩の船場町に缶詰試験所を設け米國メイン州イーストポートから老巧な技術家ユーエストリート（六十六才）とキャニホルニア洲のダブリューエスフット（二十五才）を教師として招聘一方は五百円 他は三百円を給す 當時は罐詰といわず筒詰とか管詰とかいったものである

概況

戸数 一四〇六戸 人口 八三〇八人を有する石狩町には七分農一分は商工二分は漁なりとす 地方一年の經濟（注5）は主に水陸産物に係るものなるを以て其豊凶は直に全般の經濟（注6）に影響を及ぼすの状態にして之を既往十年間平均輸出入の統計を挙げれば

輸出 一五、九六九〇円

輸入 二四、三七五七円

にして八四、〇六七円の輸入超過を示すの状態なるを見町經濟の如何なるかは窮ふに足るべし

畢竟連年水陸物産の不振に其因するものにして特に明治九年以來屢々大火あり就中市街の枢要部を焦土と化し復旧に非常に苦痛を与え之が原因により市況頓に沈静せり 農村に於ても三十一年以來數回の風水害等に罹るあり水産は明治二十三年以降薄魚に終り生計甚だ豊かな

らず加之時勢の変遷に伴ひ租税公課の負担は毎歲其度を加へ三十五年二級町村制實施以來町村費の膨張となり次で非常特別税の激増となり一般の負担實に容易ならざるに至りたり

偶々三十九年石狩石炭會社の經營（注7）に係る鉄道築港計画問題の惹起するや市況頓に一変し多年打続きたる悲觀的境遇も忽ちにして樂觀的境遇となり土地の買賣盛んに行はれ金融緩に従つて活氣を呈したるも一朝頓挫の浮目を見るや商不振に陥入り發展を予想し四方より來住せし者悉く他に轉住せるもの多く却て昔日にも増して寂莫の感を深めたり

后西沿岸鉄道敷設 河口改修等策の樹立を見たりしも理事者の更代頻々として相踵き前者の計画踏襲せられず 後者理想を劃するの違なく或は積極に或は消極に町村の發展上財政並に内部の整理に意を傾注し未だ終らざるに任を離れるあり為にや?・・・

運動の繼續を見ず 吞舟の魚を逸したるものあるやに聞く実に千秋の恨事なり

啻 石狩川治水事業のみ着々其工進み完成に近づきつゝ、ありと雖果（注8）して之が完成の暁は如何なる好果をもたらすべきかは不可則にして後者の批判に待べきもの多々あ□（注9）とす

要するに石狩をして昔日の石狩たらしむるの繁榮策何れにや在る即ち地理に相應する

事業の勃興するにあらざれば昔日の繁榮を挽回するに至難なりとす然れ共西沿岸鉄道 河口改修亦絶望に期せしや 熄として聲なく石狩川治水亦后者の批判に待べきものありて何れの日か亦た事業の勃興するの期あらん

然れ共以上は啻に水陸物産の不況に因る衰頹を來せる結果たるにすぎざるを以て産業の改良發展を期し物産の増殖輸出超過に擧町一致頹勢の挽回に努めなば今日の生産に倍□するの結果を見る蓋し疑を容れざるなり

以上

へいさらはらさ 〔鮭答〕

石狩町草分の旧家三代村山傳兵衛直舊の時に系統不詳獲得したるもの現當主十二代村山コト家宝物の中に首題の如きものあり 而て當時京都諸物鑑定師田村元雄の添翰なるものを添付せり

曰く 此の玉の儀は世上にては亀玉共相唱ひ申候得共左様にては無御座候 是れは阿和蘭陀国にてもへいさらバサルと申候で諸獸の腹中より出申候然れ共此玉之義は象の腹中より出候て甚だ面白き品に御座候 或は雨を祈り又腫物等の疼を治し膈症を治する方中に入れ申候澤山には無御座候左様に御心得可被成候

五月二十八日

田村元雄

巖谷小波氏よりの回答に曰く

御尋ねの珍玉——當時親しく拝見致さ、りし故何とも申兼候へども千里閣所藏の馬化王とは或は剥物には無之候哉 馬化玉（サンサバサラ）の事は古き書にも有之馬の胃袋中に出來候もの即ち馬が痒所を咬む祭に些少づ、口中に入りし毛が胃中にて胃液に包まれ「文字不明」形になりしものらしく之れも甚だ珍らしき為昔時は魔除と稍して頗る珍重したる由に御座候（先年柳井津の虚空藏の宝物中にも舍利塔内に秘藏せしものを見たり）然るに御持参の分は大きさも色澤も大分異り居候間矢張古鑑定之如く象或はそれに等しき巨獸の腹中より出しものかと存候尚其中何等か手掛を得て取調申可候 云々

大正十一年七月五日

以上は前町長坂牛祐直氏が在職中種々研策も大正十一年七月謹記したる中より抜翠抄記したるなり

注1 □は雨冠の下に左に鳥

注2 「かんかこどく」妻の無い男、夫の無い女、親の無い子。寄る辺ない身の上の意味。原文では「鰥」が魚鱚に罪となつてゐる。

注3 微所。わずかな場所の意か。原文では彳に山の下に土六に父。

注4 原文は「聖」が使われている。

注5 原文は「离」が使われている。

注6 原文は「圣」が使われている。

注7 原文は「圣」が使われている。

注8 原文は「董」が使われている。

注9 □は草冠に涉

解説

村山 耀一

「石狩町沿革史」という名の史料はふたつあります。ひとつは明治四十二年に石狩町役場が編纂したもので「いしかり暦」第一八号に掲載されています。もうひとつが今回掲載した「石狩沿革史」です。序文にあるように昭和六（一九三一）年に石狩町青年団によって編纂されました。その後、昭和二四年の石狩町開町八十年記念として手書きガリ版刷りで再刊されました。明治の「石狩町沿革史」とともに石狩町の昔を伝えるものとして「石狩町誌」「石狩町女性史年表」「石狩市年表」の基礎資料として活用されてきました。しかし、ガリ版刷りのため文字が不鮮明で判読が難しいことから、活字で公開されることが望まれてきました。今回は出来るだけ忠実に活字化しましたが、判読が難しい字は□としています。

本資料と関連するものは左記の通りです。

「石狩案内」 明治三十九年九月一八日 石狩新聞

「石狩町勢要覧」 大正十一年七月石狩町役場

いしかり暦第一七号「柏林」所収

「石狩町沿革史」 明治四二年五月 編纂石狩町役場

いしかり暦第一八号所収

いしかり暦 第三十六号

令和五年三月三十日 印刷

令和五年三月三十日 発行

発行者 石狩市郷土研究会

石狩市花川南五条二丁目一三一

村山耀一方

TEL 〇一三三三―七二七四八九